日本遺産
JAPAN HERITAGE

令和５年度
館林市日本遺産シンポジウム開催事業

両毛３市日本遺産こどもサミット

＼好きです！／

日本遺産のある わたしたちのふるさと

報告書

日時　令和６年（2024）2/18 日　13:30～15:30

会場　AZALEA MALL（アゼリア モール）（A館1Fアゼリアホール）

例　言

1　本書は、令和６年（2024）２月18日（日）午後１時30分から午後３時30分に、館林市のアゼリアホール（アゼリアモール内）で開催された「両毛３市日本遺産こどもサミット『好きです！　日本遺産のあるわたしたちのふるさと』」の実施結果報告書である。

2　第１部「こどもたちによる発表『紹介します！　わたしのまちの日本遺産』」では、館林市の向井千秋記念子ども科学館科学クラブ「里沼コース」のクラブ員による「百年小麦プログラム」「茂林寺沼プログラム」での活動成果、桐生市からは、未来創生塾「日本遺産講座（実践ガイド）」を修了した「桐生日本遺産ジュニアマイスター」による「MAYU を使った日本遺産ガイド」の成果、足利市からは、史跡足利学校「こども釋奠」の参加者による足利学校の説明や「こども釋奠」での活動についての発表が行われた。
　第２部「パネルディスカッション『日本遺産が育むこどもたちの“郷土愛”』」では、館林市からは科学クラブ「里沼コース」の指導者である向井千秋記念子ども科学館指導主事・穴原唯史氏、館林市立第二小学校教諭・長澤正浩氏、桐生市からは未来創生塾塾長・野田玲治氏、足利市からは足利市教育委員会事務局職員の栗原美穂氏、高橋伴幸氏がパネリストとして登壇し、「日本遺産と自分の生活との繋がり」や日本遺産を介した「世代を超えた繋がり」「地域の繋がり」などを大切にしながらこどもたちの「主体的・探究的・体験的な学び」の充実を図ることの重要性や、「楽しみながら日本遺産の普及・継承活動を続ける」ことの大切さについて、活発な討論が行われた。
　第１部、第２部ともに、コーディネーターは、高崎商科大学特任教授・館林市「日本遺産」推進協議会委員の熊倉浩靖氏が務めた。また、司会は、館林市教育委員会文化振興課長の中村豊が務めた。

3　本書の編集は、館林市「日本遺産」推進協議会事務局（館林市教育委員会文化振興課日本遺産推進係）が担当した。

4　当サミットの様子は、YouTube 館林市公式動画チャンネル内のアーカイブ映像として視聴することができる。

目　次

例言・目次

両毛３市の「日本遺産」認定ストーリー

実施結果…… 2

両毛３市日本遺産こどもサミット「好きです！　日本遺産のあるわたしたちのふるさと」講演録…… 3

開会のあいさつ　館林市「日本遺産」推進協議会会長・館林市長 多田善洋 …… 3

第１部　こどもたちによる発表　「紹介します！　わたしのまちの日本遺産」…… 3
【館林市】向井千秋記念子ども科学館科学クラブ「里沼コース」 …… 4
【桐生市】未来創生塾「日本遺産講座 (実践ガイド)」…… 7
【足利市】史跡足利学校「こども釋奠」…… 12

第２部　パネルディスカッション「日本遺産が育むこどもたちの“郷土愛”」…… 17

閉会のあいさつ　館林市「日本遺産」推進協議会副会長・館林市教育委員会教育長 川島健治 …… 22

両毛３市日本遺産 PR ブース及び日本遺産マルシェの様子（記録写真） …… 24

「両毛３市日本遺産こどもサミット」ポスター …… 25

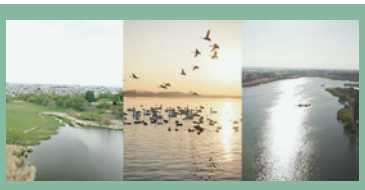
「両毛３市日本遺産こどもサミット」プログラム表紙 …… 26

「両毛３市の日本遺産にかかわるこどもたちの活動」紹介パネル …… 27

「両毛３市日本遺産こどもサミット」アンケート結果 …… 30

日本遺産
JAPAN HERITAGE

両毛3市の「日本遺産」認定ストーリー



里沼 (SATO-NUMA)

ー『祈り』『実り』『守り』の沼が磨き上げた館林の沼辺文化ー

認定年月日：
2019（令和元）年５月20日

認定形式：
地域型（館林市単独）

▶ストーリー概要

関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼 (SATO-NUMA)」であった。館林の里沼 は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を辿れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。

▶主な構成文化財

茂林寺沼及び低地湿原（県天然記念物）、多々良沼、城沼、封内経界図誌（県重文）、躑躅ヶ岡（国名勝）、正田醤油（株）旧店舗・主屋（国登録）、分福酒造店舗（国登録）、旧館林二業見番組合事務所（国登録）、東武鉄道館林駅を含む全 42 個

こどもたちの活動

構成文化財の「上三林のささら」では、地元のこどもへの技能継承が行われ、「堀工町のどんど焼き」では小学生がご神火を運ぶ役目を担っています。つつじが岡公園の子房摘みには小中学生が協力し、校内に蛇沼がある四中では環境学習が行われています。

茂林寺沼湿原では平成 30 年度より大泉高校生による保全活動が始まり、現在は廃ヨシを活用したストローづくり、キクラゲ栽培の研究も実施しています。

さらに令和 3 年度からは向井千秋記念子ども科学館科学クラブに「里沼コース」が創設され、小中学生が茂林寺沼などで活動しています。

かかあ天下 ーぐんまの絹物語ー

認定年月日：
2015（平成27）年４月24日

認定形式：
シリアル型 (群馬県桐生市の他に甘楽町、中之条町、片品村)

▶ストーリー概要

古くから絹産業の盛んな上州では、女性が養蚕・製糸・織物で家計を支え、近代になると、製糸工女や織手としてますます女性が活躍した。夫（男）たちは、おれの「かかあは天下ー」と呼び、これが「かかあ天下」として上州名物になるとともに、現代では内に外に活躍する女性像の代名詞ともなっている。

「かかあ」たちの夢や情熱が詰まった養蚕の家々や織物 の工場を訪ねることで、日本経済を、まさに天下を支えた日本の女性たちの姿が見えてくる。

▶主な構成文化財

白瀧神社（ぐんま絹遺産）、旧模範工場桐生撚糸合資会社事務所棟（市重文／ぐんま絹遺産）、桐生市桐生新町伝統的建造物群保存地区（重伝建／ぐんま絹遺産）、後藤織物（国登録／ぐんま絹遺産）、織物参考館“紫”（国登録／ぐんま絹遺産）、桐生織物会館旧館（国登録／ぐんま絹遺産）

こどもたちの活動

桐生市では、産官学民で取り組む教育プログラム「未来創生塾」を通じて、令和３年度から小中学生親子が学ぶ未来創生塾「日本遺産講座」によるこどもガイドの育成が始まりました。１年目に「日本遺産講座」を受講したこどもに桐生ジュニアアンバサダーとして認定を行い、２年目に桐生ジュニアアンバサダーによる日本遺産ツアーガイドが行われています。

日本遺産ツアーガイドを実施したこどもには、桐生ジュニアガイドマイスターとして認定を行い、これまでの２年間で１５名のこどもガイド(桐生ジュニアガイドマイスター)が誕生しました。

近世日本の教育遺産群

ー学ぶ心・礼節の本源ー

認定年月日：
2015（平成27）年４月24日

認定形式：
シリアル型（足利市の他に水戸市（茨城県）・備前市（岡山県）・日田市（大分県））

▶ストーリー概要

我が国では、近代教育制度の導入前から、支配者層である武士のみならず、多くの庶民も読み書き・算術ができ、礼儀正しさを身に付けるなど、高い教育水準を示した。これは、藩校や郷学、私塾など、様々な階層を対象とした学校の普及による影響が大きく、明治維新以降のいち早い近代化の原動力となり、現代においても、学問・教育に力を入れ、礼節を重んじる日本人の国民性として受け継がれている。

▶主な構成文化財

足利学校跡［聖廟および附属建物を含む］（国史跡）、国宝漢籍『礼記正義』『尚書正義』『文選』『周易注疏』（国宝（書跡））、釋奠（市民俗文化財）

こどもたちの活動

毎年 11 月に足利学校で行われる「釋奠（せきてん）」は、孔子とその弟子たちに供え物をし、徳をたたえる伝統行事です。この釋奠への関心を高め、伝統文化を継承することの大切さを学んでもらうため、平成 26 年から「こども釋奠」を始めました。

毎年 9 月に、公募で選ばれた市内の小中学生により、実際の「釋奠」と同じ道具や手順で執り行われます。

また、足利学校では、こどもを対象とした「論語」の素読体験なども開かれています。

令和５年度　館林市「日本遺産」シンポジウム開催事業

両毛３市日本遺産こどもサミット
「好きです！　日本遺産のあるわたしたちのふるさと」

実施結果

1　事　業　名：令和５年度　館林市「日本遺産」シンポジウム開催事業

2　イベント名：両毛３市日本遺産こどもサミット「好きです！　日本遺産のあるわたしたちのふるさと」

3　開 催 期 日：令和６(2024)年２月18日(日)
開始　午後１時30分(開場　１時00分)　　終了　午後３時30分

4　会　　場：館林市楠町3648-1　アゼリアモールＡ館１階　　アゼリアホール

5　参 加 者 数：90名

6　主 催 者 等：主催　館林市「日本遺産」推進協議会
共催　桐生市・かかあ天下ぐんまの絹物語協議会
足利市・足利市教育委員会・教育遺産世界遺産登録推進協議会
館林市・館林市教育委員会
協力　未来創生塾　桐生織物協同組合　関東学園大学RCV(地域活性協力隊)
群馬県立大泉高等学校　植物バイオ研究部・微生物バイオ研究部
アゼリアモール㈱
合同会社紬・組　松原の片桐　上三林ささら保存会　堀工町どんど焼き保存会

7　内　　容：

第1部　こどもたちによる発表　「紹介します！　わたしのまちの日本遺産」
〇コーディネーター　熊倉浩靖氏(館林市「日本遺産」推進協議会委員／高崎商科大学特任教授)
〇発表者
館林市　向井千秋記念子ども科学館科学クラブ「里沼コース」
青山俊輔さん・鎌田峻平さん／向井千秋記念子ども科学館指導主事　穴原唯史氏
桐生市　未来創生塾「日本遺産講座(実践ガイド)」
中島昊汰さん・中島小綺さん・馬場音葉さん／副塾長 小島弓実氏(群馬大学大学院理工学府)
足利市　史跡足利学校「こども釋奠」
澤田愛梨さん・須長希実さん・生田目空さん／足利市教育委員会事務局　史跡足利学校　栗原美穂氏

第２部　パネルディスカッション　「日本遺産が育むこどもたちの“郷土愛”」
〇コーディネーター　熊倉浩靖氏(館林市「日本遺産」推進協議会委員／高崎商科大学特任教授)
〇パネリスト
館林市　向井千秋記念子ども科学館指導主事　穴原唯史氏／館林市立第二小学校教諭　長澤正浩氏
桐生市　未来創生塾　塾長　野田玲治氏(群馬大学大学院理工学府准教授)
足利市　足利市教育委員会事務局　史跡足利学校　栗原美穂氏／足利市教育委員会事務局　文化課　高橋伴幸氏

8　関 連 行 事：(午前11時より午後３時半まで、会場前のアゼリアホールエントランスにて開催)

(1)　日本遺産PRブース　３市の認定ストーリーや、各市のこどもたちの活動を紹介するパネル、大泉高校のヨシストローやキクラゲ、桐生織物協同組合のコンペで入選した学生デザインの帯などを展示

(2)　日本遺産マルシェ　合同会社紬・組による館林紬関連商品や、大泉高校×関東学園大学のコラボによるヨシストローを使った「燕子花(かきつばた)ソーダ」などを販売

開会のあいさつ

司会：定刻となりましたので、令和５年度両毛３市日本遺産こどもサミット「好きです！日本遺産のあるわたしたちのふるさと」を開会いたします。

まず初めに、開会にあたりまして、主催者である館林市日本遺産推進協議会会長、館林市長多田善洋より開会のごあいさつを申し上げます。

市長、よろしくお願いいたします 。

市長：改めましてこんにちは。館林の地に皆様方にお集まりいただきまして、またご参加いただきましてありがとうございます。令和５年度両毛３市日本遺産こどもサミットを開催するにあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

日本遺産は現在104件が認定されておりますが、北関東の東武伊勢崎線の沿線である両毛地域には、桐生市、足利市、館林市の３つの日本遺産が認定されております。この３市が連携いたしまして、今後の日本遺産の魅力発信に繋げるために、令和２年度より３市の市長が集まりまして、シンポジウムを開催したり、色々なところでイベントをやったり、交流事業を開催させていただいているところでございます。

今年度は、装いも新たに、桐生市、足利市、館林市の日本遺産に関わるこどもたちの活動を紹介する「両毛３市日本遺産こどもサミット」を開催することになりました。桐生市は未来創生塾の活動を通した「日本遺産子どもガイド」の育成、足利市は孔子とその弟子を祀る足利学校の伝統行事「釋奠」のこどもたちの体験、そして館林市は、向井千秋記念子ども科学館科学クラブ「里沼コース」の活動について、それぞれ、こどもたちと指導者からご説明をいただく予定となっております。こうした活動は、身近な地域の歴史文化に目を向ける絶好の機会となると同時に、未来を担うこどもたちの「郷土愛」を育み、シビックプライドの醸成に繋がる、大変有意義なものと思っておるところでございます。

そして、本日はコーディネーターとして、日本遺産の第一人者であります熊倉先生をお招きしております。

本日のサミットの開催によって、こどもたち同士の交流が深まるとともに、日本遺産への理解がより一層深まりますようお願い申し上げまして、開催のごあいさつといたします。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

司会：市長、ありがとうございました。

申し遅れましたが、私は文化振興課の中村と申します。今日一日よろしくお願いいたします。

司会：続きまして本日の日程についてご説明いたします。お手元の資料のプログラムをご覧ください。

第１部は「こどもたちによる発表」です。「紹介します！わたしのまちの日本遺産」と題して、高崎商科大学の熊倉浩靖先生のコーディネートのもと、館林市、桐生市、足利市の順で活動を紹介いただきます。

次に第２部のパネルディスカッションは、「日本遺産が育むこどもたちの“郷土愛”」と題しまして、コーディネーターを同じく熊倉先生にお願いし、指導者の皆さんによる意見交換をお願いしたいと思います。

なお、今回のサミットの模様は、YouTubeにおきましてライブ配信されておりますので、ご承知いただければと思います。終了は概ね午後３時半を予定しております。よろしくお願いいたします。

第１部　こどもたちによる発表
「紹介します！　わたしのまちの日本遺産」

司会：それでは、早速、「第１部　こどもたちによる発表」に入らせていただきます。

ここで、熊倉先生、ご登壇をお願いします。

今回のコーディネーター役の熊倉浩靖先生をご紹介いたします。

熊倉先生は、高崎市のご出身、ご在住でいらっしゃいます。群馬県立女子大学教授を退官後、現在は高崎商科大学特任教授を務めていらっしゃいます。ご専門は歴史を活かしたまちづくりや地域活性化などで、群馬県はもとより県内各地の市や町の各種委員などを務めていらっしゃいます。館林市でも日本遺産推進協議会の委員をお願いしてございます。

両毛３市の日本遺産の連携事業におきましては、毎回コーディネートをお願いしており、今回で４回目を数えます。それぞれの市の日本遺産に直接足を運んでいただき、実情を把握した上での現場主義のコーディネーター役は、大変好評を博しておられます。

今回はこどもたちが主役ということで、これまでとは少し勝手が違うかもしれませんが、今日一日よろしくお願いいたします。

ここからは熊倉先生による進行となります。

先生、よろしくお願いいたします。

熊倉氏：ただいまご紹介いただきました熊倉と申します。日本遺産の第一人者とはとんでもなくて、「里沼」については、今日も前澤和之先生がいらっしゃいますし、数多くの先生方が務

百年小麦を
もっと世間に広めろ！

めてきたことをどう繋いでいくか、いわば「進行役」であり「繋ぎ役」だということだけでございます。

熊倉氏：最初に館林市から、こどもたちの日本遺産の紹介をお願いしたいと思います。館林市からは、青山俊輔さん、鎌田峻平さんにお願いします。前へどうぞ。

【館林市】
向井千秋記念子ども科学館科学クラブ「里沼コース」
クラブ員　　青山俊輔さん　鎌田峻平さん
科学館指導主事　穴原唯史氏

穴原氏：これより館林市の発表を始めます。館林市からは向井千秋記念子ども科学館で行われている科学クラブ「里沼コース」の活動や発見した里沼の魅力について、クラブ員の青山俊輔さん、鎌田峻平さんが発表いたします。

峻平さん：里沼コースの鎌田峻平です。よろしくお願いします。今年度の里沼コースの活動について発表します。

峻平さん：里沼コースでは、年間で大きく２つの内容について学習してきました。

１つ目は「百年小麦について」です。百年小麦とは「邑楽館林」産100％の小麦を、館林で創業した日清製粉株式会社の協力のもと製粉したものです。自然豊かな里沼が育んだ館林の小麦文化を後世までつなげていきたい、そんな思いから「百年小麦をもっと世間に広めろ！」をテーマに活動をしてきました。

２つ目は「茂林寺や茂林寺沼について」です。分福茶釜伝説で有名な茂林寺と、貴重な低地湿原である茂林寺沼湿原。「祈りの沼」とされるこの茂林寺や茂林寺沼湿原についての魅力をさがし、それを多くの人に伝えるために「茂林寺や茂林寺沼の魅力をさがせ！」をテーマに取材や調査活動を行ってきました。

百年小麦プログラム「百年小麦をもっと世間に広めろ！」の活動について発表します。

まず、最初の回で、科学館の中庭にある小麦畑で小麦粉がどれだけ取れるか、予想したときの写真です。このとき僕の計算では、この畑から取れるのはうどん約７人分ということがわかりました。

次は、収穫が終わり新しく種をまいている写真です。種まきはとても楽しかったです。

続いて、百年小麦について深く知るために、日清製粉ミュージアムで取材をしました。ここでは製粉についてかなりくわしく知ることができました。

４枚目の写真は、百年小麦を使った商品を作っているお店に取材に行ったときの写真です。館林では百年小麦を使った商品を出しているお店が多くあるということがよく分かりました。

茂林寺や茂林寺沼の魅力をさがせ！

峻平さん：５枚目の写真は、小麦を実際に生産している地元農家さんのところに取材をしたときの写真です。小麦を実際に育てるために必要なことがよく分かりました。

最後の写真は、地元スーパーのとりせんに取材許可をもらい、お店の中で百年小麦についてのアンケートをとらせていただいたものです。百年小麦を知っている方もいましたが、やはり知らない方もいたので、僕の目標は館林の誰もが知るような小麦になればいいなと思いました。

俊輔さん：里沼コースの青山俊輔です。１年間の活動を通して発見した「茂林寺と茂林寺沼周辺の魅力」について発表します。

まず、茂林寺は館林市堀工町にある「分福茶釜」という物語で知られる歴史的な寺院です。また、茂林寺ではラカンマキという植物が文化財に指定されています。さらに、静けさと平和さで、訪れる人々を魅了しています。

茂林寺は地域社会とのつながりでも魅力的です。今では閉店してしまった商店もたくさんありますが、地域活性化に向けて、観光客だけではなく、地元の方々とも交流できるような取組みもしています。

次に、茂林寺沼周辺の魅力について発表します。茂林寺沼周辺は自然が広がっており、四季折々の風景が楽しめる場所です。茂林寺周辺の森では、鳥たちのさえずりや、風が木々を通り抜ける音が聞こえてきます。他にも、日本に数少ない低地湿原の茂林寺沼は日本遺産に認定されている里沼の１つです。夏にはヨシが茂り、ホタルを見ることができます。

茂林寺沼周辺の自然は、そのままの美しさを保つために大切に守られています。訪れる人々も、その美しさを尊重し、自然を守る行動を心がけています。

俊輔さん：これらのことから、茂林寺と茂林寺沼周辺は自然環境、歴史的価値、静けさ、地域社会とのつながりなど、多くの魅力を持っていることが分かりました。

峻平さん：最後に、里沼コースの活動を通して思ったことや考えたことを発表します。

僕は百年小麦について調べることで、詳しく知ることができました。もっと広めていきたいなあと感じました。

俊輔さん：茂林寺商店街は閉店してしまっているお店も多いけど、活性化させるためにイベントを行っていることを知ることができました。また、茂林寺周辺の自然を大切にしようとする人たちがたくさんいることを知り、私たちも自然を大切にしていきたいと思いました。

ご清聴ありがとうございました。

峻平さん：何か質問はありますか？

熊倉氏：会場で質問があったら手を挙げてください。なければ僕から聞いてもいいかな？
　とてもきれいに簡潔にまとめてもらったんだけど、初めに「百年小麦」から聞こう。最初に「百年小麦」と聞いたとき、どんなイメージを持った？

峻平さん：そんなに知らなかったので「どんな感じなのかな」「深く知りたいな」と思いました。

熊倉氏：小麦を育てるのに100年かかると思わなかった？

峻平さん：そうですね。名前からして。

熊倉氏：百年小麦の大切さは、地域で食物資源として育てて、それを食品になる加工ができて、最後に商品になるという、この３つが全て繋がっていることだよね。それが君の発表でとてもよく説明されていたと思いました。

峻平さん：ありがとうございます。

熊倉氏：それで、自分でやってみて、皆に広めていくためにはどんなことをやったらいいと思う？

峻平さん：テレビのCMに出したり、最近の若者が知るために、もっと工夫したほうがいいと思いました。

熊倉氏：どんな工夫を考える？　給食なんかどう？

峻平さん：給食にうどんで出したりとか……百年小麦を使った食品を小学生とか中学生の給食で出したら、もっと広がるかなと思いました。

熊倉氏：確かに「館林のうどん」はとても有名だけど、小麦はうどん以外にも色んな利用方法があって、「＝パン」ではないんだけど、様々な食べ方を皆で作り合うとか、学校の中でも百年小麦を育ててみるとか。お米を育てている学校ってずいぶんあるよね。でも「小麦を育てている学校って僕らの学校なんだ」「それを給食で皆で食べているんだ」っていう風にしたら、百年小麦は定着するよね。

峻平さん：はい。

熊倉氏：そうしたら、「あんた方、ダメよ。私が作るからね」ってお母さんたちが学校にいっぱい出てくるだろうし、お父さんたちは「耕したり、製粉したりするなら俺も手伝うぞ」って言って、世代間交流が生まれていくかもしれないね。

峻平さん：はい。

熊倉氏：そうすると、足利市や桐生市のお友達も「館林市に食べに行こう」という気持ちになるかもしれない。頑張って。

峻平さん：はい。

熊倉氏：次に里沼の方を聞くね。「里沼」というのは、館林市が日本で最初に発表した考え方なんだけど、「里沼」とか「茂林寺沼」って聞いたときに、君はどんな風に思った？

俊輔さん：初めは沼について関わっているのを知って、例えばどんな取組みをしているのか、ずっと疑問に思っていました。

熊倉氏：「里山」は一般的に知られるようになったけど、里山に対して「館林周辺の邑楽地域では沼が『里山』の役割を果たしている」というのが「里沼」のイメージであり概念なんだけれど、それを里沼コースの学習を通して実感した？

俊輔さん：はい、実感しました。

熊倉氏：その実感で、どんなことを皆に伝えられる？

俊輔さん：里沼での取組みを、地域だけでなく、インターネットなどで広く伝えていきたいと思いました。

熊倉氏：それはもう、小学生でも中学生でもできることだよね。昔は「発信する」ことや「何かを作る」ということはとても大変だったけど、今は簡単に発信ができるようになったし、そういうことを学校もまちも、つまり市も応援してくれると思うので。特に向井千秋さんの名前はものすごく大きいネーミングだからね、そこからぜひ発信をしてください。
　そして次にもう１つ質問ね。「茂林寺沼」って聞いた時どう思った？　茂林寺はとっても有名なんだけれど……。

俊輔さん：最初は普通の沼だと思っていたんですけど、学習をしていく途中で、数少ない低地湿原だとかそういうことを知ってとてもすごいなと思いました。

熊倉氏：本当にそうだよね。茂林寺のことは、群馬県民は結構知っているし、お隣の栃木の皆さんもある程度知ってくださっているけど、全国の人は「茂林寺沼」については初めてだったと思う。これからもぜひ、茂林寺とセットで発信をしてください。

とても良い発表と、僕が突然思った質問に見事に答えてくれた２人に拍手をお願いいたします。

では交代をしましょう。２人は席に戻ってください。

【桐生市】

未来創生塾「日本遺産講座（実践ガイド）」

院　生　　中島昊汰さん　中島小綺さん　馬場音葉さん
副塾長　　小島弓実氏（群馬大学大学院理工学府）

熊倉氏：では、お隣のまち、東武伊勢崎線を戻ります。桐生のグループに行きましょう。桐生からは、中島昊汰さんと中島小綺さん、馬場音葉さんの３人です。お願いします。

昊汰さん：これから「MAYUをつかった日本遺産ガイド」について説明します。未来創生塾の中島昊汰、

小綺さん：中島小綺、

音葉さん：馬場音葉です。

小島氏：皆さん、こんにちは。未来創生塾の院生の皆さんに日本遺産ガイドについて発表していただくその前に、未来創生塾の副塾長の小島と申しますが、桐生市の未来創生塾について簡単にご説明させていただきます。

未来創生塾は、桐生市で2013年より正式に実施しております特別な教育プロジェクトです。桐生市、群馬大学、桐生商工会議所が協同して、主に小学生の親子を対象にして、感性を育み本質がわかる人材を育成すること、それから地域に誇りを持ったこどもたちを育成することを目的として実施しています。

こちらは創設者の群馬大学名誉教授の故宝田恭之先生です。宝田先生は科学技術に特化した方なのですけれども、科学技術だけではなく、地域のことにも精通している先生でした。その方が桐生市、商工会議所、群馬大学の協同ということで、産官学民一体化でこどもたちに夢と希望を与える人材教育塾を開設いたしました。

特徴としては、親子を対象にしているということ、１回のワークショップということではなく年間を通して系統立てた活動を実施しているということです。

未来創生塾のビジョンは「地域力による抜本的な課題解決」ということです。私たちの住む地域を見ても、人口減少、少子高齢化、地域産業の疲弊などの様々な課題があります。もう少し視点を広げてみても、地球温暖化等、取り組むべき課題というものがたくさんあります。それを未来を託すこどもたち、未来社会をつくるこどもたちの感性を育み、本質のわかる人材を育成するということで、様々な実体験を、地域が協同をして継続的に提供すること、それによって地域が一体化し活性化することを目的として実施しています。

未来創生塾で実施してきたプロジェクトをこちらにお示ししています。文化・歴史・産業・自然・工学・芸術・国際と、様々なジャンルを系統立てて実施しています。そして地域への誇りを醸成し、社会を理解し、地球環境、生物への意識を高め、独創的な思考を養うということを目的として実施しているものです。こちらが様々な活動の写真をピックアップしたものです。

小島氏：この後、未来創生塾３年目の皆なに、２年間を通して様々な体験を実施した後に、日本遺産を学んで、自主的に主体的にガイドを企画していただきました。

こどもたちが一から企画をして、お客さんを募ってガイドを実践してもらったわけです。「準備がすごく大変だった」という感想をいただいておりますが、一緒に同伴、伴走した親御さんの感想がこちらにあるのですけれども、「自信に満ち溢れた表情を見て大変感動しました」と言っております。私も毎回、やり終わったあとの、こどもたちの誇らしげな顔に感動しております。

それでは、実際に、こどもたちに日本遺産ガイドの説明をしていただきたいと思います。

昊汰さん：今回の日本遺産ガイドを実施する１年前、未来創生塾２年目の活動で、僕たちは桐生市の日本遺産について勉強しました。講師は、桐生の魅力を案内している「“織都桐生”案内人の会」の方です。「日本遺産とはどういうものか」というところから始まり、桐生市にある日本遺産や重要文化財についての説明を受けました。桐生市の中に多くの日本遺産があることに驚きました。講義の後は実際に市内を歩いてまわり、重要伝統的建造物群など歴史的建造物をたくさん見学しました。自分の住んでいるまちだけど、知らないことが多くありました。

未来創生塾　日本遺産講座

織都桐生案内人による座学

見学

そして、その翌年、2023年10月９日、「日本遺産を通じた桐生市の魅力体感ツアー」というテーマで、僕たちがガイドを行いました。当日はあいにくの雨でしたが、足元の悪い中、大人は12名、こども２名の計14名の方が参加してくれました。午前９時に桐生駅南口に集合し、MAYUバスと徒歩で観光を楽しみ、午後４時に解散となりました。

行程は僕たちで話し合って決め、それぞれが説明したい場所をピックアップし、実際に訪問して説明文を作成しました。魅力ある施設やワークショップ、どれも外せないものばかりだったため、一日がかりの観光コースとなりました。昼食はベーカリーカフェレンガでいただきました。鋸屋根の歴史を感じる店内で食べたパンはどれもおいしかったです。

僕たちは、未来創生塾の活動で、桐生市内にある日本遺産について勉強し、次にガイドツアーを企画しました。実際にガイドツアーを企画して案内することで、興味のある所をより勉強し、理解を深めることができました。そして、自分の住んでいる桐生に誇りを感じることができました。

今回の日本遺産ガイドの目的です。「桐生市内の日本遺産について勉強した知識を生かし、塾生自らがガイドとして桐生市内を案内することで、自分の住む街に対する誇りを持つ」「市内、市外の人へ桐生のよさを紹介して街を元気にする。桐生を好きになってもらう」「移動はグリーンスローモビリティである

『MAYU』と徒歩で実施し、環境にやさしい観光ツアーの実現」です。

では、ツアーの内容について紹介する前に、まずは日本遺産について説明します。

小綺さん：日本遺産とは、地域の歴史と魅力や特色を通じて、日本の文化・伝統を語るストーリーのことです。建物ではなく、ストーリーということがポイントです。全国では104つのストーリーが日本遺産に認定されており、群馬県では「かかあ天下－ぐんまの絹物語－」と「里沼(SATO-NUMA)」の２つのストーリーが認定されています。

群馬県は織物が盛んで、女性が織物に関係する仕事で家計を支え、活躍していました。そこで、男たちは「おれのかかあは天下一」と呼び、これが「かかあ天下」として群馬の名物になりました。こうしたストーリーが日本遺産になっています。この「かかあ天下」にはストーリーを構成する13件の文化財があり、そのうちの６件が桐生市に存在しています。

今回のツアーでは、日本遺産６件のうち絹撚記念館、重伝建(重要伝統的建造物群)、織物参考館“紫”の３か所を見学しました。その他にもこのような方々にお世話になりました。ご協力いただいたのは「ふやふや堂」の齋藤さん、「天然染色(そめいろ)研究所」の田島さん、「ベーカリーカフェレンガ」の武田さん、「工房風花」の板野さん、「四辻(よつじ)の斎嘉(さいか)」の小林さんです。

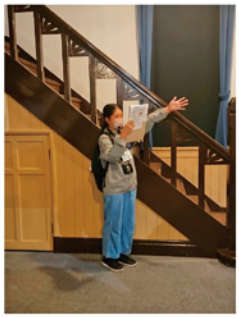
今回のツアーでは、地域の方々との交流も大切にしました。わたしたちが説明をした後に、桐生市の歴史や魅力を語ってもらいました。皆さん、桐生に愛着を持ち、歴史的建造物を大切

地域の方々との交流

に利用されていました。熱い志を持ち、地元で活躍されている方の話はどれも興味深く、大変勉強になりました。

次に、実際のガイドツアーの様子をご覧ください。
（動画再生）

小綺さん：では実際にガイドをした感想を発表します。



私は、絹撚記念館を説明しました。絹撚記念館は旧模範工場桐生撚糸合資会社の事務所として使われていた建物です。日本最大の撚糸工場で、たくさんの女性が働いていました。撚糸とは糸に撚りをかける技術のことを言います。この建物は大正６年に建てられ、群馬県最古の洋風石造建造物と言われています。

ガイドをするにあたり、何度も絹撚記念館に足を運び、どのように説明をしたらよいかを考えました。絹撚記念館の方にお話をうかがい、展示にはない情報も説明に加えることができました。

初めてガイドをしたので、すごく緊張しました。説明するときは、お客さんが聞き取りやすいように大きな声でゆっくり話すことを心がけました。分かりやすいように、説明している展示物を手で示すようにしました。

私は、今までイベントなどに参加する立場だったけれど、実際に自分がガイドをしてみると、下調べをして説明文を作ったり、どうすればお客さんに伝わるかを考えたりするのが大変だということが分かりました。

これからは、桐生にあるたくさんの施設についてもっと勉強をして、桐生を好きになっていきたいと思いました。

昊汰さん：僕は桐生天満宮について説明しました。

昊汰さん：僕がこの場所を選んだ理由は、天満宮は桐生を代表する建物であることと、細かい彫刻の素晴らしさをお客さんに伝えたいと思ったからです。桐生天満宮は今年の９月に国指定重要文化財に指定されました。天満宮に祀られているのは、学問の神・菅原道真です。菅原道真は当時優秀な学者・文化人・政治家で、多くの人から「天神様」と呼ばれ広く尊敬されました。壁には「二十四孝」という中国の親孝行にかかわる物語が3つ彫られています。この彫刻を彫ったのは、あの日光東照宮の彫刻を彫った左甚五郎の９代目の弟子の関口文治郎です。彼はここ以外にも妻沼の聖天宮、秩父の三峯神社などの彫刻も手掛けています。

ガイドをしてみて、「お客さんのペースに合わせて移動する」「説明するときの目線や身振り手振り」「声のボリュームとスピード」など、気を付けることが多かったので大変でした。

今回のガイドで桐生天満宮とそれ以外について色々と調べることができたので、市外の友達に桐生の素晴らしさを伝えてあげたいです。

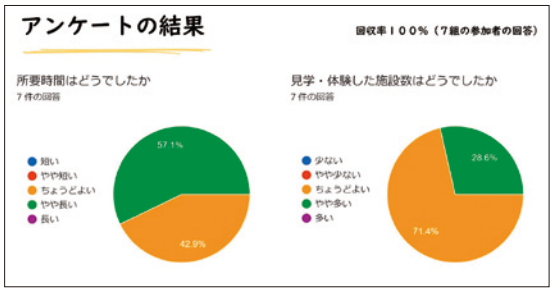
音葉さん：私は織物参考館“紫”を説明しました。

私が参考館“紫”を選んだ理由は２つあります。１つ目は鋸屋根を説明したかったからです。２つ目は、ガイドをする前にハンカチ染め体験をして楽しかったからです。

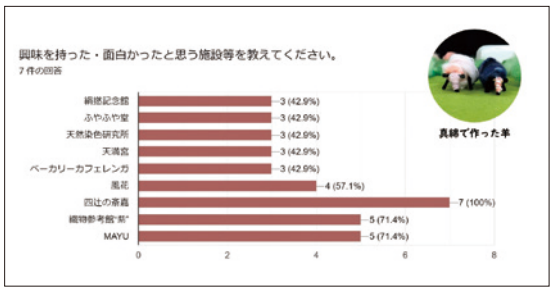
織物参考館“紫”ではハンカチ染め体験と機織り体験をしました。途中でクイズを出しました。クイズの内容は「なんで機織り機の椅子には背もたれがないのか」という問題です。正解は「居眠りをしないようにするため」です。

音葉さん：次に、お客さんの反応についてです。

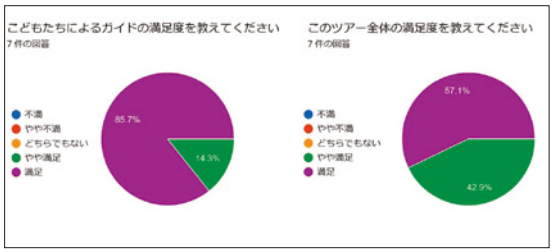
日本遺産ガイドに参加していただいた方にアンケートを取りました。



「所要時間はどうでしたか」の質問は「やや長い」が多くて、「見学・体験した施設数はどうでしたか」の質問は「ちょうどよい」が多かったです。この結果を見て、ガイドをした時間が午前９時から午後４時までだったので、集合時間を９時半や10時にすればよかったなと思いました。



「興味を持った・面白かったと思う施設等を教えてください。」の質問で一番多いのは「四辻の斎嘉」です。次に多いのは「織物参考館“紫”」と「ＭＡＹＵ」です。その次に多いのは「風花」です。その４つの共通点は「体験をすること」なので、面白かったのかなと思いました。



「こどもたちによるガイドの満足度」と「このツアー全体の満足度を教えてください」の質問は、両方「満足」が多かったので、一生懸命説明をした甲斐があったなと思います。「やや満足」を「満足」に変えていくために、お客さんともっと話をしたり、説明を多くすればよかったなと思いました。

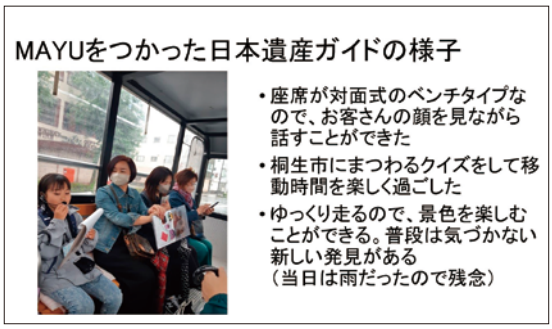
音葉さん：これが「織物参考館“紫”」で作ったハンカチです。一緒にやったことでより仲が深まりました。みんなハンカチを作っている時にニコニコしていたので楽しかったと思います。

ガイドをしてみて、説明するために聞いたり調べたりするのが大変だったけれど、伝えることの楽しさもわかってよかったです。

昊汰さん：ここで、低速電動コミュニティバス『ＭＡＹＵ』の紹介をします。

MAYUは、群馬大学と群馬県内の会社を中心に2011年に開発されました。時速19kmまでの速度でゆっくりと公道を走ることができます。インホイルモーターで走行し、車輪は８輪あります。バッテリーは家庭用電源で充電でき取り外しも可能です。屋根にはソーラーパネルを搭載しています。電気で動くため、排気ガスが出ないので環境にやさしいです。座席が対面式のベンチタイプなので、車内での会話が弾みます。全国で約50台あり、東京の池袋では『IKEBUS（イケバス）』という名前で走っています。

次に､グリーンスローモビリティについて説明します｡グリーンスローモビリティとは、国土交通省、環境省にて普及推進されている時速20km未満で公道を走ることができる電動車を活用した小さな移動サービスで、その車両も含めた総称です。グリーンは低炭素、スローは低速運転、モビリティは電気自動車をあらわします。グリーンスローモビリティの導入により、地域が抱える様々な交通の課題や低炭素型交通の確立が期待できます。



実際の「MAYUをつかった日本遺産ガイド」の様子です。座席が対面式のベンチタイプなので、お客さんの顔を見ながら話すことができました。桐生市にまつわるクイズをして移動時間を楽しく過ごしました。ゆっくり走るので、景色を楽しむことができます。普段は気づかない新しい発見があるかもしれません｡当日は雨だったので景色を楽しむことができず残念でした。

昊汰さん：当日の車内での様子です。（動画再生）

車内ではお客さんとクイズをして盛り上がりました。楽しそうな様子が伝わったでしょうか？

最後に、日本遺産ガイドツアーを実施した感想です。初めて企画から実施までを通してやりました。説明する側の立場だったので、事前準備の大変さを知りました。特に、お客さんを案内するための原稿は、納得のいく内容に仕上げるのに時間がかかりました。緊張しましたが、参加者の皆さんが楽しかったと言ってくれたのでうれしかったです。

そして、今年の１月には、荒木市長よりジュニアガイドマイスターの認定証をいただきました。今回の経験の活かし、たくさんの友達に僕の住んでいる桐生市の魅力を教えてあげたいです。

お聞きいただき、ありがとうございました。

熊倉氏：はい、とても盛り沢山なテーマでした。

今、桐生市は「ゆっくりズムのまち」ということで「SDGs未来都市」に選ばれていますよね。その背景というか基盤の中に日本遺産があるということが、今日の話を聞いてとてもよく分かりましたし、群馬大学という教育資源が活かされているというのが、皆さんにとてもよく伝わったと思います。

そういう中で、３人はそれぞれこのガイドツアーをやってどんなことを最後に思ったか、あるいは自分にとって得るものがあったか、1人ずつ紹介してください。

昊汰さん：僕が得たことは、ガイドをするにあたって、色々な建物とか歴史とかをたくさん調べて発表したので、ほかの日本遺産、例えば「里沼」などについても調べて、ストーリーにも興味を持ちました。

熊倉氏：大切なことだね。

小綺さん：私が思ったことは、桐生にある日本遺産についてたくさん知ることができたので、このことを活かして学校の友達とか色々な人に広めて、教えて、桐生をもっと賑やかにしていけたらなと思いました。

音葉さん：色々な人に伝えることの楽しさが分かりました。

熊倉氏：具体的にどんな風に楽しかった？

音葉さん：大人やこどももたくさんいたので、分かりやすいように伝えることができました。

熊倉氏：きっと、君たちが学んだことを他の人にお伝えする時に、「100知ったことをどう10だけで喋るか」、ものを切っていく「苦しさ」と「楽しみ」の両方を実感したと思うけれども、その辺は３人はどうでしたか？　色々学んだけど、ただ、そのまま言ったわけじゃないでしょう？　「このことだけを喋ろう」とか「このことを強調しよう」とか、そういうことはどうだった？

昊汰さん：僕は桐生天満宮について説明したんですけど、例えば『二十四孝』という物語のストーリーは親孝行にかかわるものなので、その物語のあらすじとかは言いました。あと、彫刻のことは、色とりどりだったということも伝えました。

熊倉氏:実は今度の足利の発表にも繋がっていく話なんだけど、24の親孝行の話の中のどこに感銘したかということを、多分、君は話しただろうし、群馬県は、実は関口文次郎という彫刻家のお弟子さんたちが、数多くの寺社建築や装飾に携わっています。でも、今はまだ、それが色々なところで気づかれていません。桐生の天満宮が国の重要文化財になったこと自体はとても大きな意味があって、これでやっと、群馬・栃木の色々な彫刻に対する人々の目が変わっていくと思います。

その技術と織物と、多分「美的な繋がり」があるのかもしれない。そのことを君が投げてくれると、みんながまた繋がっていく。いいところに目をつけました。「あそこを歩いて、伝建群（重要伝統的建造物群）よりも天満宮なんだ」ってびっくりした。見事でした。

では、同じように色々な学んだことをまとめる中で、絹撚記念館に絞って、しかも何を中心に伝えた？

小綺さん：私たちより１年前にガイドをしてくれた人たちのガイドツアーに実際に行ってみて、絹撚記念館に一番興味を持ったので説明しました。

熊倉氏：それ、とても素晴らしい答えです。自分が一番感じたことを人に伝えるっていうこと。君自身が「私は感動したし皆に伝えたい」というその気持ちが伝わって初めて繋がっていくし、「先輩から学んだことを君が後輩に伝える」こと、それが多分、ほかのまちの人々にも桐生の日本遺産を伝えていく力になると思います。期待した以上の答えをありがとう。

では、最後に行きましょう。

音葉さん：私は織物参考館“紫”を説明したんですけど、その説明ガイドをする前に、ハンカチ染め体験を実際にみんなでやってみてとても楽しかったし、色の変化とかが見られたから、織物参考館“紫”にしました。

熊倉氏：これもそのとおりだと思います。やっぱり実体験の中で「自分も感動した」し、「これは人に伝えたい」、多分、日本遺産がそれぞれに伝え合っていることとか、それがみんなの力になっていくのは、自分が「良かったよね」「面白かったよね」「調べてみたいよね」「だからみんなに伝えるんだよね」っていうことが、３人の発表の中には本当にしっかり繋がっていたと思います。これは、我々自身が色々なことで「共有しなければならない」ことを、改めてこどもたちに教わったなと思いました。３人、ありがとうございました。

【足利市】

史跡足利学校　「こども釋奠（せきてん）」

澤田愛梨さん　須長希実さん　生田目空さん
足利市教育委員会事務局　　栗原美穂氏

熊倉氏:さて、今「二十四孝」の話が出ました。「二十四孝」や様々な話の中で、桐生天満宮の彫刻は、確か、５人のこどもがお花と一緒に車を引いている平和なのどかなところが一番評価されていますよね。そうした世界を作ろうと言って、人々に色々な教えを説いたのが孔子様ですよね。

その孔子様に繋がる足利の「こども釋奠」の話を、次にお願いします。「こども釋奠」は澤田愛梨さん、須長希実さん、生田目空さん、お願いします。

空さん：みなさん、こんにちは。足利市立西中学校３年の生田目空です。

愛梨さん：白鷗大学足利中学校２年の澤田愛梨です。

希実さん：足利市立御厨小学校５年生の須長希実です。

空さん：これから足利学校や、私たちが参加した「こども釋奠」の紹介をしたいと思います。まず最初に足利学校を皆さんに知ってもらいたいと思います。

愛梨さん：足利学校は、足利市のちょうど中心にあります。写真を見てください。中央に渡良瀬川が流れています。その北側、黄色の線で囲んだ場所が、足利学校です。もう少し近づいてみましょう。

足利学校には、大きな建物がいくつかあります。写真を見てください。

一番左の建物は、「大成殿」といいます。私たちが参加した「こども釋奠」は、この建物の中で行われています。

真ん中は「方丈」といいます。畳が敷かれた大きな部屋になっていて、学生たちの講義や色々な行事で使われていたそうです。

一番右の建物は「庫裡」といいます。足利学校にいた人たちが生活していた建物で、ご飯を作るためのかまどや台所があります。

足利学校の建物のうち一番古いものが、この大成殿です。今から350年以上前の江戸時代の前半に建てられました。建物の中には孔子の像が置かれています。

方丈の中は、とても広い1つの部屋のようになっています。私たちが小学校の教室で先生から授業を受けているように、昔の人たちも、この部屋で色々な講義を受けていたのかもしれません。

写真は庫裡のかまどや台所です。

また、足利学校の中には「サエンバ」と呼ばれている畑があります。今でも「釋奠」でお供えする大根は、この畑で育てられたものを使っています。昔の人もサエンバで色々な野菜を育て、庫裡の台所で料理して食べていたのだと思います。

希実さん：足利学校でいちばん大切にされているものは「本」です。「なんか地味～」と思った方はいませんか？

見た目は地味かもしれませんが、実はすごい本なんです。今から800年以上昔に中国で作られた本で、日本中を探しても足利学校にしかありません。もしかしたら世界中探しても足利学校にしかない、本当にオンリーワンの本なのかもしれません。

写真は、足利学校でも特に大切にされている４つの本です。日本全体でみてもとても大切なので、４つとも「国宝」になっています。足利学校には「足利学校でしか見られない本」がたくさんあります。こうした本を読みたくて、全国からたくさんの人たちが足利学校にやって来たと言われています。

足利学校の大切な本を守るため、毎年、本の「虫干し」が行われます。これは「曝書」と呼ばれています。本を箱から出して乾いた空気に当てながら、１ページずつ壊れていないか確認していきます。足利学校では、こうした伝統行事が今でも行われています。

私たちが参加した「こども釋奠」も、伝統行事の１つです。

次は、「こども釋奠」の様子を、写真を見ながら話していきたいと思います。

空さん：ここからは「釋奠」について紹介していきます。

普段、見慣れない漢字ですが、「釋」も「奠」も「お供え物を置く」とか「並べる」という意味を持っています。

昔、足利学校では孔子の教えを勉強していました。尊敬する孔子を大切に思う気持ちを表すために、食べ物や飲み物を捧げる儀式が「釋奠」です。

ちなみに、孔子は、約2500年前の中国の人です。足利学校で教えていた「儒学」のおおもとの考えを作った人でもあります。

それでは、実際の儀式の様子を見ていきましょう。

儀式が始まりました。

まずは、祭官が並んで、大成殿へと向かいます。

孔子廟に入る前に、きれいな水で手を洗って身を清めます。

大成殿の中はこのような感じになっています。

まず最初に、会場にいる皆さんへ、儀式の始まりをつげます。

次に、みんなで分担をして、野菜や魚、肉などを捧げます。

お供え物は、写真のように、特別な形の祭器に載せて捧げます。

11月の「釋奠」と同じものを「こども釋奠」でも使っています。

空さん：そして、こちらが実際に使われている祭器の１つです。よくご覧ください。

次に、飲み物を器に入れて供えます。

飲み物を入れる器は、このような、少し変わった形をしています。

こちらも、これが実際に使われている「爵」と言われる器です。

そして、次に、孔子に尊敬の気持ちを表すために、２回お辞儀をします。

これは、孔子の前でお香をあげています。

そして、代表者が孔子を讃える言葉を読み上げます。

空さん：孔子に捧げた飲み物を、少しいただいて、代表者が飲んでいるところです。

儀式中は、プロの楽師の方々に雅楽の演奏をしていただいています。

最後に、儀式の終了をつげます。

足利学校の「釋奠」では、儀式が終わった後に、全員で、孔子の教えである「論語」を元気に素読します。

これで、「こども釋奠」の紹介は終わりです。

栗原氏：ありがとうございます。では、ここからは、足利学校で「こども釋奠」が始まった経緯をお話しさせていただきます。

足利学校の「釋奠」は、江戸時代以前から行われていたと考えられています。明治40年に儀式の進め方や内容を改めて定め、多少の変更はありますが、それから100年以上、現在に至るまで、同じやり方で続けています。足利学校オリジナルな部分もあり、儀式そのものは市の民俗文化財に、また儀式で使われる祭器も有形文化財に指定されています。

こうした伝統行事は、末永く市民の間で引き継いでいく必要があります。そこで、伝統行事である「釋奠」にこどもの頃から関わってもらい、足利学校への関心を高めてもらおうと、平成26年から「こども釋奠」が始まりました。これまで、小学生、中学生を中心に、多くのこどもたちが参加してくれています。

今日、足利学校を紹介してくれた３人は、昨年９月に開催された「こども釋奠」に参加してくれたこどもたちです。最後に、参加した感想を、一人一言話してもらえたらと思います。では、生田目さんからお願いします。

【第１部】
こどもたちによる発表
「紹介します！わたしたちのまちの日本遺産」
令和５年度 館林市日本遺産シンポジウム
好きです！日本遺産のあるわたしたちのふるさと
本日の主役
来場者
来賓
来賓
来賓

愛梨さん：私たちがやっている「こども釋奠」では、お酒の代わりにお茶を入れています。

熊倉氏：緊張して飲めないんじゃない、お茶でも。どう？

愛梨さん：私は今回飲む役をやらせていただいたんですけど、「飲んだ方がいい」って言われたので飲もうと思ったんですけど、爵を傾けてもお茶が出てこなかったので飲むことができませんでした。

熊倉氏：そういうのを「癪に障る」っていうんだよ。まあ、それは冗談だけれども。

「爵」というのは古代中国、孔子以前からあって、多分3000年ぐらい前からの金石でできるものだから……まあ、それはレプリカだと思うけれども……そうしたものを扱っていくことによって、中国から日本へ伝わった大きな文化の流れを実感していくって、とても貴重な経験だよね。桐生の子や館林の子も「こども釋奠」を是非見に来てもらうと同時に、最後に、レプリカだから爵ぐらい持たせてあげてちょうだいね。

それから、それは「豆（とう）」になるかな。豆には確かお野菜を入れるんでしたっけ？　豆の中に大根を入れると結構重いでしょう？　どう？　やってみて。

愛梨さん：重かったです。

熊倉氏：実際の「釋奠」で使われる本物はもっと重いですよね。

栗原氏：そうですね。「こども釋奠」では軽量化を図るために、ピーマンとかナスとか軽いお野菜を入れるようにはしているんですけど、大人の方だと、大根と白菜と里芋と椎茸と人参とが載るので。器自体も、見ていただくと分かるとおり、かなり重いもので、２～３kgはあるんじゃないかなと思います。

熊倉氏：こどもたちが「ピーマンが嫌だ」とかなんか言った時に、「釋奠」のこの「豆」を使って給食を作るとみんな食べるかもしれないね。そうやって、伝統って実感を持って継承しているという意味でとても重要だと思いました。

それから「釋奠」って当たり前に言っていますけれども、足利のこどもたちはあれを「せきてん」と当たり前に読めるでしょうが、桐生や館林の子は、あの字を見て「せきてん」って読めないよね。でも、これを機会に覚えよう。「隣のまちには、こんな文字で、こんなすごいことがあるんだ」って。僕らも実際、参加をする、見る側の立会人にはなれますから。是非そうやって交流をしていくことがいいと思いますね。

熊倉氏：最後に、素読は、今回は『論語』のどこをお読みになりましたか。

空さん：今回は『論語抄』の中の３つの文章を……。具体的な内容はちょっと忘れちゃったんですけど、声を大きくして読むことができました。

熊倉氏：今、彼は壇に上がっているので、緊張して忘れたことにしていますけど、しっかり覚えているはずです。そうやって言葉が伝わっていること自体が、孔子様からの命が伝わっているということなので、とても素晴らしい催しだと思います。是非、桐生や館林のお友達にも「立会人に来てね」と伝えてください。ありがとうございました。

熊倉氏：３市のそれぞれのこどもたちの発表、実に見事でした。私たちは文化財だとか遺産だとか、特に「郷土の歴史やものを大切にしましょう」って言うんだけれども、やっぱりそれは、関わって、実感を持って、ガイドをするなり、学ぶなり、行事を伝えるということをやって、初めて伝わっていくんだということを、この３市のこどもたちは、私たちに教えてくれたと思います。

そうしたものに、やはり親子で、あるいは様々な形で、みんなが参加をすることを通して……交流にも縦の交流、そして３市での横の交流……こんなに恵まれた場所はありませんので、ここから日本と日本の文化の継承ということを大きく一歩踏み出す、まさに「日本遺産サミット」にふさわしい催し物を、こどもたちが我々以上にしてくれたということについて、改めて、喜びと感動と、そして「続けてほしいね」「我々も参加したいよ」という気持ちを込めて、拍手で第１部を閉じたいと思います。

３市のこどもたち、本当にありがとうございました。

司会：ありがとうございました。熊倉先生もありがとうございました。

ここで10分間の休憩を取りたいと思います。14時50分の再開を予定したいと思います。

休憩時間中に足利学校の「こども釋奠」で使う「爵」を囲んで歓談
左より　桐生市・中島小綺さん、館林市・多田市長、川島教育長、足利市・須長希実さん、コーディネーター・熊倉浩靖氏

第２部　パネルディスカッション
「日本遺産が育むこどもたちの“郷土愛”」

司会：第２部パネルディスカッション「日本遺産が育むこどもたちの“郷土愛”」を始めさせていただきます。

それでは早速ですが、パネリストの皆さんをご紹介いたします。まず館林市から、向井千秋記念子ども科学館指導主事の穴原唯史さん、館林市立第二小学校教諭の長澤正浩さん、桐生市は「未来創生塾」塾長で群馬大学大学院准教授の野田玲治さん、続いて足利市は、足利市教育委員会の栗原美穂さん、同じく足利市教育委員会の高橋伴幸さん、最後にコーディネーターは引き続き熊倉先生です。よろしくお願いいたします。

熊倉氏：では、早速、第２部に入っていきます。35分しか時間がないので、皆さんには、かなり喋りたがるのを「５分くらいで我慢してね」って言っています。私も余計な合の手を入れないようにします。

まず、館林市から付け加えることや強調したいことを是非お願いします。

穴原氏：それでは館林市から発表させていただきました科学クラブの里沼コースについて、いくつか補足説明をさせていただきたいと思います。

穴原氏：この里沼コースですが、探究的、体験的なプログラムを通して日本遺産「里沼」をテーマにして、「こどもたちの郷土愛の醸成」や「次世代の郷土の担い手の育成」を目指す目的で、2021年度から始まり、今年で丸３年経っております。こちらのコースの事業コンセプトとしては「主体的・探究的・体験的な活動の充実」、それを実現するために、外に出ているパネルにもあるんですが、こどもたちには「ミッション」という形式で体験活動を進め、その中で参加者自身が課題を見つけたり、課題解決の方法を考えていけたりできるようにしております。

この里沼コースを実践するにあたって、我々「大人」が大切にしていることが大きく２つございます。１つは「大人が手を出し過ぎない」ということです。体験や人との触れ合いの中でこどもが起こした行動やこどもの発想について、基本、大人は「見守る」という立場で事業を行っております。大人は「こどもの活動の環境」を準備する、その中でこどもが「もっと知りたい」「もっと調べたい」と思ったことを「学び」へと昇華させる、そういったことを基本に考えて作ってきております。

もう１つは、今日の色々なこどもたちの発表の中にもあったのですが、「繋がり」というものを非常に重視しております。「こども同士の繋がり」「縦の繋がり」「様々な世代との繋がり」、それから「『里沼文化』や自然と自分の生活との繋がり」、そういった繋がりを体験活動を通して経験できるようにしてきております。特に、この「里沼」の自然や文化を守ってきた「先人たちの思い」に触れることができるように、地域人材の活用を図ってきました。小中学生がクラブ員となっているのですが、参加者であるこどもたちから見て年齢の近い高校生から、長く地元でボランティア活動している方まで、幅広い世代の人々の思いに触れ合える体験をできるように意識しております。

こういった体験を、人々に触れながら主体的にこどもが学ぶ、いわゆる「探究的な学び」を「学びの軸」としている「学校教育の学び」が、「総合的な学習の時間」なのです。

今、隣に来ている長澤先生は小学校の先生なのですが、実は市内の小中学校の先生が、この科学クラブの里沼コースの講師をしております。一緒にプログラムを考えていただいたり、このプログラムの内容や、実施にあたって協力いただいた地域人材を、実は学校教育にも活かせるように実践研究をしてきております。その研究、学校教育での実践について、長澤先生からちょっとご説明いただきたいと思います。

長澤氏：私、館林市立第二小学校教諭の長澤と申します。よろしくお願いいたします。

私は、先程穴原指導主事からありました館林市教育研究所の「里沼」研究の所員として、さらに第二小学校では「生活科」「総合的な学習」の主任を務めさせていただいております。そういった中で、１～６年の先生方とこどもたちに「里沼文化」の良さを働きかけていく中、３年の担任というのもございますので、3年の担任としての実践の一例を挙げさせていただきたいと思います。

２学期が中心になりますが、まず「里沼文化」の１つである「武鷹館」に連れて行き、昔遊びを体験させました。こどもたちはとっても楽しそうに色々な遊びに触れ合うことができました。そしたらその後に、「じゃあクラスに帰り、それを誰に伝えようか」というのをこどもたちと一緒に決めました。その中で「１

年生に教えよう」ということで、ここで課題が設定され、地域に広がる昔遊びを１年生に教えようということを実践課題として、こどもたちと一緒に「学び」が始まりました。

長澤氏：けれども「武鷹館だけじゃ昔遊びについて詳しくないよね」「じゃあどういう風にしようか」ということで、川島教育長が掲げているもう１つの柱の「コミュニティスクール」、地域連動の下ですね、城沼公民館の「さわやか教室」の高齢者の人たちに昔遊びの作り方、遊び方を教わってきました。その中に、これ私のアイデアですが、「笹舟もどうかな」「城沼で流せるかな」なんて冗談を言いながら、こどもたちと一緒に習ってきました。

そしてその後に、じゃあ、「それをどうやって教えるか」ということで、こどもたちは「やってみせる」であったり、やはり今の子ですからChrome bookを１台ずつ持っていますので「動画に撮って教えたい」、あとは「紙に描いて教えたい」ということが挙がりました。そしてその準備をし、実際に「昔遊びランド」を開いた次第でございます。

そうすると、こどもたちの声として、「主体的な学びだった」とか、「探究的に思考・判断・表現力を高める」とあったんですけど、一番最近思ったのが、今３学期で３年の社会で館林市の歴史を教えていて、「旧秋元別邸」とか「旧上毛モスリン事務所」とかが出てくると、こどもたちが自然と「あっ、これ『里沼文化』だ」って呟くんですよね。それが全ての答えだと思います。

さらに、うちの教室のちょうど目の前に「正田邸」があるのですが、それを眺める子が増えました。これを「里沼文化」と言っていいかどうかは別として、「郷土愛」は間違いなく高まったと思うので、学校教育において「里沼文化」がとても有効であると申し述べさせていただきます。私からは以上です。

熊倉氏：「武鷹館」という言葉がありました。館林市の方は当たり前なんですけれど、桐生市や足利市の方は初めて耳にされるかもしれません。武士の「武」に「鷹」という漢字を書きます。元々は武家屋敷ですけれども、それを郷土資料館のように、あるいは文化会館的にお使いになっていらっしゃる。これ自体も、地域にとって歴史的な文化財を活用する１つの例だと思いますので、参考までに付け加えさせていただきました。

では次に、桐生市の野田さん、お願いします。

野田氏：未来創生塾の野田と申します。私、未来創生塾の塾長でもあるんですけども、群馬大学の理工学部の教員でもあります。未来創生塾について、最初に冒頭で少し説明させていただきましたけど、なんで始まったか、ちょっと簡単に説明させてもらいます。

実は十数年前に群馬大学と桐生市とで「脱温暖化」のプロジェクトというのがありました。要は、これからの社会をどう作っていくか。炭素の利用やCO_2の発生を抑えること。私はエンジニアリング、工学なので、技術的な話をずっとやってきたんですよ。

その結果、何が分かったかというと、「工学だけでは物事は解決せんな」と。技術でこの問題を解決することはものすごく難しいことで、私の前の塾長・宝田先生も同じエネルギーの分野でご活躍されていて、同じご意見で、すごく重要な1つの方向性が「そこに我々がどういう生活をするのかというところがものすごい重要ですよ」と。

「一人一人が自分のやりたいことをできるだけ速やかにやる」ためには「たくさんのエネルギーが必要」です。でも「実はそういう社会って、持続性がないんじゃないでしょうか」「どういう風に我々の行動を変えていけば脱温暖化に繋がっていくのか」「人の行動をどういう風に変えていくことができるだろうか」みたいなところから、未来創生塾は始まっています。

じゃあ、「日本遺産はどう関係があるのか」って話になりそうなんですけど、実はすごく関係があるんですね。さっきも言いましたように、例えば、私たちが楽しく生活するために、新しい建物がボンと建って、経済的な活動も活発になります。でも、それには莫大なエネルギーと資源をそこに突っ込んで、それを立て替えながらやっていく。それを壊して作り、壊して作る。これでは持続性がないですよね。

一方で、我々日本人の心の中に少しある「あるものを大事に使っていく」という感覚は、実はエネルギーとか資源の削減では、これはめちゃめちゃ効くんですね。「あるものをものすごく大事に使いながら、そこからいかに価値を生み出していくか」、例えばそれを「地域の活性化」に結びつけていったりする。そういうところに価値観を見出すような人が増えてくると、「地域も元気になる」し、なおかつ「エネルギー消費も減っていくんじゃないか」っていうようなところに実は繋がっている、と我々は信じているんですね。

桐生市さんから「未来創生塾の活動の中にこういうものが位置づけられないでしょうか」という提案があった時に、「すごくいいです」「是非一緒にやりたい」と。我々としては、まさにここに価値を感じているわけですね。それをどう発揮させて地域で利用していくか。これはものすごく大きな課題なんですけど、うまくやると、脱温暖化型の新しい産業としてできていく。桐生市はこういうことをやっていかないといけないだろう。

私は未来創生塾の塾生の皆さんにはあまり細かいことは言わないんですけども、「まずは楽しいことをやりましょう」。それからポイントがいくつかあって、「物を長く大事に使いましょ

う」とか、あとは「一人一人がバラバラじゃなくて、移動もみんなでバスを使って動くとエネルギー削減に繋がったりする」んです。そういう風に「みんなが楽しいことをやりながら、脱温暖化に繋がっていくようなことっていっぱいあるよね」、それを実践しながら「楽しかったね」、これができて初めて「本当の意味での脱温暖化」が実現します。実際、温暖化を防止するのは簡単ですよ。人間がみんな死んじゃえば温暖化は止まっちゃうわけですから。でもそれではダメなんですよ。我々が楽しく生きながらでの脱温暖化、これを塾生は塾生なりのアイデアで色々試してみる。

野田氏：私自身は、正解はそこにないと思っています。色々なトライアルをして、そこで塾生が色々感じたことをどう表現してくれるか。「地域にこんなものがあって良かった」、その結果が、実は脱温暖化に繋がった。色々なものが絡み合っている。実は問題って別々のように見えるけども、結構根っこのとこで繋がっていて、うまく使って、それが新しい地域の姿を作っていく。それが、例えば地域のコミュニティを維持させるとか、今、色々な問題が起こっているところに結構、起用できるであろう、そういうことで未来創生塾の活動を続けてきています。

このガイドをやって今３年目ですけれども、結構、反響が大きくて、直接地域の人と関われる。お客様としてもそうだし、我々としてもそうなんですけど、すごくいいことで、「ああ、やって良かったな」と、正直、今一番感じているところです。

熊倉氏：館林市の方が「ミッション」ということを言って、その中でこども自体がどう繋がりを作っていくか、具体的に「里沼」とか「百年小麦」の話が出てきているのと同じように、今、野田さんの言われたやはり「ミッション」「私たちの暮らしをどう持続させるのか」、その中でいわゆる地球温暖化なり、脱炭素に対してどうするかと。その時に「ここをこう」というよりも、それを自分たちの暮らしに戻した時に、どう楽しく無理なく行けるか、それを見直すというためには「様々な人が色々なことをやったり、学んだりしていって、繋がりの中から思考錯誤の中で見えてくるよね」、ただそれは「面白さがなければ続かないよね」ということを見事に言ってくださったと思います。だからこどもはそれに飛びついてくれるし、大人だって「我々ももう一度見直していきましょうね」ということだと思いますね。ありがとうございました。

では、それを受けて、今度は足利市にお願いいたします。

高橋氏：足利市では、第１部で「こども釋奠」について参加した皆さんから活動内容や感想をいただいたところです。これを受けて、「こども釋奠」や日本遺遺産の活動に関わっている大人の視点から、感想や課題として見えてきたものをスライドでまとめてみましたので、ご覧いただければと思います。

栗原氏：主催する大人の側の立場からいくつかお話しさせていただければと思います。

先程の感想のところでも 結構、皆さんが言ってくださっていたんですけど、「足利学校が好きだ」と言ってくれるこどもたちがいることが、日常的に足利学校で業務を行っている者、「こども釋奠」を担当している者として、率直に嬉しいと思っています。

栗原氏：また、「釋奠」というもの自体が「釋奠保存委員会」という組織が主催して行っているんですけれども、そちらの委員の皆さんも、こどもたちが積極的に活動している姿を見て、「自分たちもしっかりしなければ」と引き締まる思いを感じていらっしゃるようです。

そんな「こども釋奠」なのですけれども、次のような悩みを抱えています。

まず１つは、毎年参加者を公募で募っているんですけれども、どうしても土日なので、学校行事やクラブ活動と重なることが多くて、新たに参加してくれるこどもが年々少なくなってきているということがあります。

また、もう１つは、これは仕方ないことであり、地方はどこも悩んでいることと思うんですけれども、足利学校に興味を持って関わってくれた子たちも、いずれは進学や就職の機会で足利市を離れていってしまって地元との繋がりが薄れてしまうということがあります。

そして、これからの課題としては、まず「より多くのこどもたちに足利学校に関わってもらいたい」ということ、それからもう１つは「参加してくれたこどもたちが、無理なく、強制されるわけでもなく、今後も足利学校に関わり続けられるにはどうしていったらいいのか」ということを考えています。

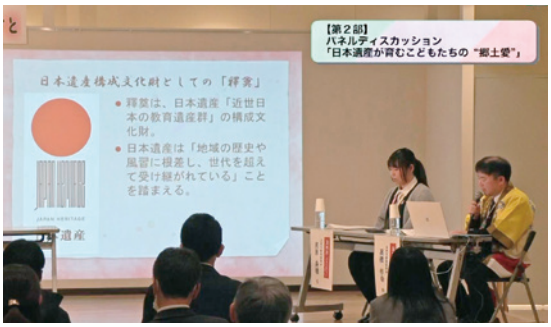
今後の仕組みづくりとして考えていきたいと思っているのが、「こども釋奠」と大人の「釋奠」とのつながりです。先ほどもお話しましたが、「こども釋奠」は平成26年に始まり、令和５年度で10回目を迎えています。第１回目に参加してくれたこどもたちの中には、大学３年生、４年生がいて、この子たちが間もなく卒業して社会人になっていきます。この子たちが今度は大人の「釋奠」に参加できるような仕組みを作ることで、長く伝統行事を継承していくサイクルのようなものを作れるのではないかと考えています。

高橋氏：そういった事情を受けまして、私は日本遺産を担当していますので、日本遺産側から見たお話をしようと思います。

皆さんがご存知のとおり、日本遺産は「ストーリー」と「構成文化財」という２本の柱でできています。「釋奠」は日本遺産「近世日本の教育遺産群」という日本遺産の構成文化財になっております。「こども釋奠」の元になっているこの「釋奠」が構成文化財になっているんですけれども、日本遺産のストーリーの基本としては「地域の歴史や風習に根ざしていること」「それが世代を超えて受け継がれているということ」がやはり重要なポイントに挙げられていると思っています。

日本遺産的に考えますと、「こども釋奠」の存在は、「こどもから大人まで世代を超えて日本資産の構成文化財を将来につないでいく」「将来に引き継ぐ」ということを「補強する事業」と

考えているところです。もっと考えてみますと、「補強するもの止まりでいいのかな」と、これを見ながら思ってきました。というのも、「大人釋奠」……便宜上「大人釋奠」と「こども釋奠」と言わせてもらいますけれども、「大人釋奠」は当然ながら「日本遺産の構成文化財」になるんですが、やはり「こども釋奠」というのも、これはあくまで私の担当としてこうなると面白いのかなって考えているだけであって、必ずそうなるわけではないんですが、「こども釋奠」もその「日本遺産の構成文化財」になるんじゃないかと、これを書きながら思ったところです。



なぜそういうことを考えるかと言うと、これは逆接的なんですけれども、「日本遺産の構成文化財」になるということが、少しでも「こども釋奠」の理念を後世に繋げる助けになるのなら、というのが一番の思いになります。

日本遺産というのは「なって終わり」「獲得して終わり」ではなくて、「日本遺産という『箔』をどのように使って『まち』を興していくのか」、先ほど先生方もおっしゃったように、その「繋がりを作っていく」のか、そういったところに使えるための「ただのツール」でしかないのかなと思っています。そういったところで、この「伝統文化を引き継ぐ」ことに「日本遺産という『箔』がどうやって使えるんだろう」というのは、今後、考えていく必要があるのではと、日本遺産の担当として考えているところです。

日本遺産は「世代を超えて歴史や文化を引き継ぐ」ということが理念になっていますが、これは足利市が昭和56年に設定した「足利市の教育目標」でも、内容の柱の最初に「郷土の自然や文化財の愛護と文化の振興」をしていきましょうよと打ち出されています。下の表では、児童期から少年期、成年期、高齢期とあって、その全てを貫く柱として「郷土の自然や文化に親しみ、その保護、振興、発展に努める」という大きな柱があります。こういったところと、日本遺産の考え方、一番基本的な理念というのは、合致する部分が非常に多いと思っています。

日本遺産を、そういった部分でも「ツール」として利用していく方法を今後考えていく必要があると、足利学校と日本遺産を一緒に考えている者として感じたところです。

足利市からは以上になります。

熊倉氏：高橋さんから極めて本質的な議論を投げかけられたので、これをここで議論できるか、これから皆さんと共有しなきゃいけないんですけれども、そうしたことが、こどもたちの活動を、我々が見、参加をし、支えることを通して、初めてより具体的に見えてきたという意味で、今日はとても意味のあったことだと思うんです。

日本遺産って、確かに文化庁が「認定」はするんですが、多分「世界遺産に対して日本遺産を作りたいよね」っていう思いでやっちゃったところもあって、実は、「３年間は補助金を出す」けれど、それはインバウンド用のパンフレットを作ってほぼ終わりで、「それ以降は自走しなかったら取り消すよ」という滅茶苦茶な制度ですよね。でもそれを言っちゃった以上、本当に建前で言ったことを、こどもたちがちゃんと受け止めてくれて、多くの市民の皆さんが受け止めてくれて、みんなが動き出したのならば、「これこそ日本遺産」なんだということを、３市の実情を訴えるということがやっぱり一番いいんだろうと。それだけのものを私たちは今獲得できているんだろうなという風に、まず、思いましょうよ。そして、その上で、どうもそういう気運が日本中にできてきたんで、文化庁は「『文化財活用地域計画』を各地域で作りなさい」と。それは「未指定文化財も含めて、地域がどうやって、地域の資産を、自分たちの地域で皆が暮らし続けるために文化財を活かしていくか」いうことを皆で考えて継承しましょうね」「それを市の中心計画にちゃんと位置付けましょうね」というところへ来た。だから、少なくともこの３市はそれができるところへ来た。これが「日本遺産を活かして、実際にその地域が持続的に発展する道」なんだということを我々に見せているぞと。

それは、こどもたちが動いてくれたことによって、我々自身も気づいた。「それなら大人も一緒に学びましょう」っていうのが大切かな。（こどもの）修学旅行に対して「大人の修学旅行をやろうよ」って話と同じで、大人も同じように学ぶ機会を作っていく。それはコミュニティスクールもそうですし、実は未来創生塾も。我々の世代から上も「もうちょっと公民館等で勉強しようよね」と、そういう形を作っていくことに繋がってきたなと思います。

今、高橋さんがまとめてくださったことは、ある意味でこの会のまとめになるようなことだったんですが、それを中間のまとめとして、我々はあと10分時間をいただいているので、それぞれのところから、自分への決意と皆さんへの決意、そしてこどもたちへの感謝の気持ちを込めて、一言ずつお願いしま

しょう。順番は逆に、足利市から行きましょう。

高橋氏：私はこの会に参加する上で、「今抱えている課題に対してどういったアプローチの仕方があるんだろう」「皆さんがどう考えているか学びたい」、そういう場面にしようとずっと思っていました。その中で、先ほど先生方から意見が出たような、まず「その繋がりを作る」ということ、それと、今、確かに１人１台のタブレット端末をお子さんが持っている時代になってきましたので、文化財の世界でもそうなんですけれども、それをうまく使えないかと、これは栃木県の文化振興課も考えているところなんですが、そういったところに活路があるかもしれないというのを教えていただいたような気がします。

それと、未来創生塾のお話の中で、ただその活動をするにしても「楽しむこと」というのがすごく大事なのかな、確かに「楽しまないと続かない」と思いました。

今日気づいたところはこの２つで、今後自分が考える上でのアドバイスをいただいたような気がいたします。

栗原氏：私は「こども釋奠」を担当しておりまして、今年で５年です。ただ、うちの行事は、未来創生塾や里沼コースのようには連続性がなく、単年度の参加で終わってしまうこどもも多くて、これまでは、その年の「こども釋奠」が終わったら、参加者とは関わりがなかったんですね。

今回、ここにお三方に参加してもらうことで、改めて「こども釋奠」に参加してどうだったかという思いを直接聞く機会をいただいて、足利学校や「こども釋奠」を愛してくださっていることが分かったのが、私の中でのすごい収穫で良かったなと思っています。そういった思いを持っているこどもたちがいるというのが嬉しくて、それを未来に繋げていけるように、今後も頑張っていきたいなと思いました。

熊倉氏：きっとあの３人は中心になって「こども釋奠実行委員会」をこれから作っていっちゃうよね。「大人になんか任せてられるか」「私たちが孔子様のお伝えをちゃんと伝えるんだ」っていう、そんな気持ちを持っているよね。大丈夫だよね。

では、野田さん。

野田氏：まず「大人も含めた学び」という視点のご指摘がありましたが、実はこれも未来創生塾が当初から考えていて、私も含めてなんですけれども、議論があった。「なぜみんなこういう活動…例えば脱炭素の活動…に参加してくれないのだろう」とか色々議論をした時に、「いや、こどもから巻き込んだ方が早くないですか」「そうすると親も巻き込めるんじゃないか」と。

野田氏：実際、色々活動をやってみて「確かにそうだよね」と。親もそれを一緒にやって、色々とこどもをサポートしたりして、すごくいい立て付けになっているなと。

その中での課題は、例えば、そういう積極的に参加する層は一定数はあるんですけど、そうでないところにどうリーチするか、今後もう少し考えていかなきゃいけないところになってくる。

現実的には、やはり色々な活動で、その地域の人が半分ぐらい入ってくると、色々な状況がどんどん変わってきて、本当の地域性みたいなもの、地域の特色のようなものに繋がって、色々な伝統的な活動を通じていく。

これは私の意見ですけど、それを「必ずしもそのまんまやる必要はない」と思っていて、それをベースに「新しい地域のあり方ってどうなんだ」みたいな議論が出てきた方が面白い。

例えば、桐生市で言うと、今「ゆっくりズムのまち」を提唱していますけれど、「そういうまちになるとみんながいいよね」と。「あんまりせかせかしてないけど、なんとなく楽しいじゃないですか」みたいなことで、そこで「みんなが元気に生きていける」ってどういうことなんだろうと。だから、そういうところに大きなベクトルがだんだん向いていく中で、色々な活動がそこに根付いていくと、そういうものに繋げていけるといいな、とかですね。

そして、未来創生塾は、私のイメージとしては、その中でトライアルをやる１つのフィールドになりうる。こどもに参加してもらって、うまくいかないことは、僕は全然悪いこととは思っていないんですよ。だって誰も分からないことですから。やってみて初めて分かることはたくさんあって、「やってみたからこうなった」「ここはこんな感じで行きたかったけど、ここはちょっと想定外だった」。でも想定外だったかどうか、やらなきゃわからないわけで。やっぱり僕なんかもそうですし、市や色々な企業さんも入ってもらって、投資としてそういうことをどんどんやってもらって、それがどこかで、後々、目を開いて、新しい産業なりなんなりが起きてくる…みたいな流れができるといいなと。そういうものにうまく繋げていけるといいなと、今、考えているところでございます。

熊倉氏：未来創生塾が初めから「親子で」という考えでいらして、中島さんのところも馬場さんのところも、お父さんお母さんが「こどもたちより私たちの方が学んだよ」っていう気になっているかもしれないよね。そういう繋がりがとても大切ですよね。

では最後に、館林市。

長澤氏：教育の大原則はやって見せるんだぞということを、若い頃、今もそうですけれども、大先生に習ったことがあります。「郷土愛」「地域愛」「伝統継承」でしょうか。そういったところに向けて、行政も動いていて、こどもたちも火がついてきたとなると、これは私自身への何よりの「戒め」なんですけれども、「教員が研修でも何でもいいから『里沼』について学ぶ」ということだと思います。これに尽きるような気がします。それが、私自身が今年1年間、少なからずやってきたことでありまして、それを、私も含め色々な先生に、私が少し働きかけてみたりとか、例えば学校だったら、校内研修の「資質向上研修」を例に、「『里沼』にちょっと触れてみようよ」「武鷹館に行って来ようよ」とかはできなくはないと思うんですよね。まず、私も含めて、

館林市内の教員が「里沼」や「里沼文化」に興味を持つこと。そうしないと、多分、そこからこどもの興味なんて出てこないと思うんです。何の教科でも……今、国語、算数などの教科指導は絶対揺るぎないところなんですが、そういった「里沼文化」に対して、「教員自身が興味を持つ」というところ、これが私も含めて、これからずっと続いていくことかな、そういう学びが重要だと思っております。以上です。

熊倉氏：俊輔さん、峻平さん、長澤先生はともかく、他の先生に対しては、僕らの方が『里沼』は教えられるよな。そういう授業をしよう。

そういう「お互いが学び合う雰囲気」が作られていく、そして、これを機会に、やはり３市のこどもたち、そして３市の市民の交流が繋がってこそ、日本遺産のあるべき姿を示すし、それは１つのツールであって、やっぱり地域が、みんなが楽しく無理なく暮らし続けられる姿を作っていくということになるんだと思います。

ちょうど時間が予定の３時25分になりますので、この後、教育長さんにバトンタッチをして、私の役目は終わらせていただきたいと思います。

先生方、そしてこどもたちに、改めて感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました

司会：パネリストの皆さん、それから熊倉氏先生、大変内容の濃い貴重なお話をいただきました。ありがとうございました。

改めてご登壇の皆さんに盛大な拍手をお願いいたします。

それから、こどもの皆さんも後ろを向いて。お礼を言ってください。ありがとうございます。

閉会のあいさつ

司会：ここで、本日ご参加の皆様に対しまして、主催者を代表いたしまして、館林市日本遺産推進協議会副会長、館林市教育長川島健治より、お礼のごあいさつを申し上げます。

教育長、よろしくお願いします。

教育長：皆さん、改めましてこんにちは。教育長の川島と申します。本日は遠く、桐生市さんや足利市さんから、また地元館林市からこんなにもたくさんの皆さんにご参加いただきまして本当にありがとうございます。

冒頭の多田市長のあいさつにもありましたけれども、例年は大人のシンポジウムということで、市長さん同士がパネルディスカッションを行ってまいりました。けれども今回は館林市が２巡目の幹事役になりましたので、こどもたちに視点を当てて「両毛３市日本遺産こどもサミット　好きです！日本遺産のあるわたしたちのふるさと」と称して開催させていただきました。

こどもたちの発表も本当に素晴らしかったですし、パネリストの皆さんの発表も素晴らしかったので、私の感想と言いますか、講評と言ったら大変失礼ですけども、それが本当に貧相なもので恐縮に感じているんですが、僭越ですが、私の方からお礼の言葉を述べさせていただきたいと思います。

「紹介します！　わたしのまちの日本遺産」では３つの市の代表の方々がそれぞれ素晴らしい発表をしてくださいました。

まず最初に桐生市さんですが、未来創生塾の活動の一環として令和３年度からこどもガイドの育成が始まったということです。１年目には「日本遺産講座」を受講して「桐生ジュニアアンバサダー」に認定され、さらにそのアンバサダーが２年目に「日本遺産ツアーガイド」を自ら実施することで「桐生ジュニアガイドマイスター」になるという、２年がかりで段階的に資格制度を行っているというのが素晴らしいと思いますし、より専門性が高められ、主体的に関わることでこどもたちも本当に自信を深められたのではないかと思います。また、6名のこどもたちが半年かけてツアーを企画し、14名の見学者を案内しました。やはり自分が身につけた知識を名前も知らない見学者の方に分かりやすく伝えることは、知識はインプットするだけではなくてアウトプットすることでより一層本物になる、自分のものになると言われていますけれども、まさに理解が深められたのではないかと思っております。さらに地域の方々との交流も図られたということですので、本当に素晴らしい取組みで、今後もますますジュニアアンバサダー、またガイドマイスターが増えていくのかなと感じました。

次に足利市さんの取組みです。私も実は足利学校には何度も足を運んでおりますけれども、足利学校の本のことも初めて知りましたし、すみません、「こども釋奠」、私、読めませんでした。すぐにネットで調べて、ああ、こういうことなんだと知って、ちょっと恥ずかしくなりました。でも、今日の発表を聞いてすごくよくわかりましたし、足利学校では室町時代の頃から断続的に「釋奠」が行われてきた、そして現在のような形は100年ほど前からで、10年ほど前の平成26年から「こども釋奠」が始まっている。これは日本遺産に認定されるその前から行われていた。こどもたちが「祭官」となって「釋奠」を行うということは、多くのこどもたちに足利学校への関心を高めていただくともに、郷土愛を育む、すごく良い効果が得られたのではないかなと思っております。

さらに、広く礼節を重んじる日本文化とか伝統文化などを、こどもたちが体験を通してより深く学ぶと言った上でも、効果

的で有意義だったのではないかと思います。今後も一層、孔子様のことを学びたいと思うこどもたちが増えてくるのではと思いました。

最後に、地元館林市の取組みですが、向井千秋記念子ども科学館の科学クラブの活動は以前からずっとありましたが、「里沼」の日本遺産認定によって開設されたのが「里沼コース」です。今回の発表では、「百年小麦」と日本遺産「里沼」の構成文化財である「茂林寺沼」をテーマにして、様々な体験調査活動など、学校ではできないようなことに取り組んで「探究的な学び」を行ってくれました。

小学校４年生から中学校３年生まで18名いるということですけれども、郷土の良さを再発見できるように、自然体験とか観察とか実験、そういった「科学分野」だけではなくて、歴史とか文化という「社会的な分野」まで体験活動を行っている、そして自分から「なぜ」とか「どうして」という疑問を出発点として取り組まれたことで、より知識とか知恵が自分のものになってきているのではないかと感じています。探究を進める中で、より里沼のこと、館林のことが好きになったんじゃないかなと思いました。

こうして「紹介します！　わたしのまちの日本遺産」の取組みを振り返ってみますと、いずれにも共通することが２つあるかなと感じました。

まず１つは、こどもたちが主体的に体験を通して取り組んでいる、参加しているという点であります。こどもたちが楽しみながら主体的に参加するというのはすごく広がりがあるし、発展性もあると思います。これは「持続可能な取組み」に繋がっていくと期待できるところです。

もう１つは、テーマのとおりなんですけれども、いずれも「こどもたちの故郷を大切に思う気持ち」「郷土愛」がすごく育まれてきていることを強く感じました。「郷土愛」というのはすぐに成果には現れないかもしれないですけれども、畑に蒔かれた種が時間をかけて自分たちのそれぞれの地域でゆっくりと成長して、いつか花を咲かせ、実を実らせていく、といったことを期待して止みません。

私も、市内の学校間でこどもたち同士が学習発表する様子は見たことがありますが、市を越えて、こうやって別の市のこどもたち同士が学習発表を行うというのを、初めて経験することができました。非常に貴重な機会で、こどもたち自身にも良い機会になったと思っております。

また、後半のパネルディスカッションですけれども、パネリストの桐生市の群馬大学の野田玲治先生を始め、足利市の栗原様、高橋様、そして館林市の穴原様、長澤様には、「日本遺産が育むこどもたちの“郷土愛”」をテーマに、多くの皆さんの前でディスカッションしていただきまして、本当にありがとうございました。

皆さんのご発言から、皆さんが「こどもたちに、こうして郷土愛を育んで欲しいんだ」という熱量と言いますか、情熱みたいなものを感じることができました。また、３市それぞれの皆さんから、それぞれの取組みの課題をお聞きして、これからのそれぞれの解決策の参考、１つのヒントになったような気がしております。本当にありがとうございました。

最後に、高崎商科大学の熊倉浩靖先生には、コーディネーターとして、前半のこどもたちによる発表から後半のパネルディスカッションまで、それぞれの発表者やパネリストのご意見をうまく掬い上げて繋げていただきまして、大変実り多いシンポジウムに作り上げていただきました。今回もまた、両毛３市のこれからの日本遺産への取組みの貴重なご示唆をいただいたように思います。今後とも盛り上げていただければありがたいと思っております。今日は大変ありがとうございました。

結びになりますけれども、これからも桐生市さん、足利市さん、そして館林市のそれぞれが、日本遺産を通じてますます多くの人々の交流が生まれて、活気あふれるまちになりますように、また、こどもたちが「郷土愛」を育んで、健やかに「郷土に誇りに持つ」ような大人になっていくことを期待して、結びのあいさつとさせていただきます。

本当にまとめになりませんでしたが、大変ありがとうございました。ご来場の皆様も大変お世話になりました。ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。

以上で「両毛３市日本遺産こどもサミット」の全日程を終了いたしました。皆様いかがだったでしょうか。楽しんでいただけましたでしょうか。

これにて、令和５年度両毛３市日本遺産こどもサミットをお開きとさせていただきます。

お帰りの際にはアンケートのご記入、それから、この会場をご提供いただきましたアゼリアモールにて、お時間の許す限り、是非お買い物を楽しんでいただければと思います。

長時間に渡りまして、ご協力ありがとうございました。

両毛３市の日本遺産ＰＲブース・日本遺産マルシェの様子（アゼリアホールエントランス）

館林市（堀工町のどんど焼き・上三林のささら・科学クラブ「里沼コース」の紹介）

両毛３市（館林市・桐生市・足利市）の日本遺産の紹介

館林市（日本遺産「里沼」の紹介）

桐生市（日本遺産「かかあ天下」・未来創生塾「日本遺産講座（実践ガイド）」・織物協同組合のコンペで入選した若い世代による桐生織作品の紹介）

館林市（大泉高校による茂林寺沼湿原での保全活動・
「ぶんぶく茶釜のヨシストロー」プロジェクトの紹介）

足利市（日本遺産「近世日本の教育遺産群」（足利学校）・「こども釋奠」の紹介）

大泉高校×関東学園大学ＲＶＣ（地域活性隊）「ぶんぶく茶釜のヨシストロー」プロジェクトによる「燕子花（かきつばた）ソーダ」等の販売

「紬・組」による館林紬関連商品の販売

館林の里沼

令和6年 2/18 日

令和5年度 館林市日本遺産シンポジウム in 館林市アゼリアホール

両毛3市日本遺産こどもサミット

＼好きです！／

日本遺産のある わたしたちのふるさと

館林市・桐生市・足利市で日本遺産の継承や普及にかかわるこどもたちの活動発表や、それを支える大人たちによるパネルディスカッションを通して、３市の日本遺産にかかわる人々の交流を深めます。

令和6年
2/18 日 13:30～15:30〈開場13:00〉

当日オンライン配信あり！

会場 AZALEA MALL（アゼリア モール）｜A館1Fアゼリアホール
（〒374-0004 群馬県館林市楠町3648-1 / TEL:（0276）75-8512）

定員 100名（申込順） 参加無料

13:35～

こどもたちによる発表 「紹介します！ わたしのまちの日本遺産」

発表者　向井千秋記念子ども科学館 科学クラブ「里沼コース」/ 未来創生塾「日本遺産講座(実践ガイド)」/ 史跡足利学校「こども釋奠」参加者 …のみなさん

コーディネーター　熊倉浩靖氏（館林市「日本遺産」推進協議会委員/高崎商科大学特任教授）

14:40～

パネルディスカッション 「日本遺産が育む こどもたちの”郷土愛”」

パネリスト　向井千秋記念子ども科学館 科学クラブ「里沼コース」指導者 / 未来創生塾 塾長 野田玲治氏(群馬大学大学院理工学府准教授) / 足利市教育委員会事務局職員

コーディネーター　熊倉浩靖氏（館林市「日本遺産」推進協議会委員/高崎商科大学特任教授）

同日開催

11時00分～会場前にて開催！

● 日本遺産PRブース ●

３市認定ストーリーの展示のほか、大泉高校生のヨシストロー・里沼キクラゲ、桐生織物協同組合主催のコンペで入賞した学生たちの作品も展示します。

● 日本遺産マルシェ ●

「館林紬」関連商品や、大泉高校×関東学園大学コラボによる「カキツバタソーダ」の販売を行います。

発表者

向井千秋記念子ども科学館 科学クラブ「里沼コース」

館林市

里沼（SATO-NUMA）

発表者

未来創生塾「日本遺産講座(実践ガイド)」

桐生市

かかあ天下 ―ぐんまの絹物語―

発表者

史跡 足利学校「こども釋奠（せきてん）」

足利市

近世日本の教育遺産群 ―学ぶ心・礼節の本源―

申込方法

2/2（金）9:00 より受付開始

ぐんま電子申請受付システム

FAX・メール

1.名前 2.電話番号 3.メールアドレスを記入し、
FAX:（0276）74-4113
Mail: nihonisan@city.tatebayashi.gunma.jp まで送信

主催 館林市「日本遺産」推進協議会
問合せ先 館林市教育委員会 文化振興課 日本遺産推進係
〒374-0018 群馬県館林市城町3-1
TEL:（0276）71-4111
※ 2/18当日の問合せは、TEL:(0276)74-4111(館林市文化会館)へ

共催 /
足利市・足利市教育委員会・教育遺産世界遺産登録推進協議会 /
桐生市・かかあ天下ぐんまの絹物語協議会 / 館林市・館林市教育委員会

令和５年度館林市日本遺産シンポジウム

日本遺産

両毛3市日本遺産こどもサミット

好きです！　日本遺産のある　わたしたちのふるさと

館林市

里沼（SATO-NUMA）

向井千秋記念子ども科学館
科学クラブ「里沼コース」

桐生市

かかあ天下 ―ぐんまの絹物語―

未来創生塾
「日本遺産講座（実践ガイド）」

足利市

近世日本の教育遺産群
―学ぶ心・礼節の本源―

史跡足利学校「こども釋奠（せきてん）」

日　時：令和6年2月18日（日）　13:30～15:30（開場　13:00）
会　場：アゼリアホール（館林市楠町 3648-1　アゼリアモール　A 館1階）

【プログラム】

13:30　**開会のあいさつ**　館林市「日本遺産」推進協議会会長　多田善洋（館林市長）

13:35　**第１部　こどもたちによる発表　「紹介します！わたしのまちの日本遺産」**
- ○コーディネーター　熊倉浩靖氏（館林市「日本遺産」推進協議会委員/高崎商科大学特任教授）
- ○発表者　館林市　向井千秋記念子ども科学館科学クラブ「里沼コース」
  青山俊輔さん　鎌田峻平さん　/　向井千秋記念子ども科学館指導主事　穴原唯史氏
- 桐生市　未来創生塾「日本遺産講座（実践ガイド）」
  中島昊汰さん　中島小綺さん　馬場音葉さん　/　副塾長　小島弓実氏（群馬大学大学院理工学府）
- 足利市　史跡足利学校「こども釋奠」
  澤田愛梨さん　須長希実さん　生田目空さん　/　足利市教育委員会　栗原美穂氏

14:40　休憩

14:50　**第２部　パネルディスカッション　「日本遺産が育むこどもたちの“郷土愛”」**
- ○コーディネーター　熊倉浩靖氏（館林市「日本遺産」推進協議会委員/高崎商科大学特任教授）
- ○パネリスト　館林市　子ども科学館指導主事　穴原唯史氏　/　館林市立第二小学校教諭　長澤正浩氏
- 桐生市　未来創生塾　塾長　野田玲治氏（群馬大学大学院理工学府准教授）
- 足利市　足利市教育委員会　栗原美穂氏　/　高橋伴幸氏

15:25　**閉会のあいさつ**　館林市「日本遺産」推進協議会副会長　川島健治（館林市教育委員会教育長）

【関連行事】　※11:00 より、会場前のアゼリアホールエントランスにて開催

① **日本遺産 PR ブース**　３市認定ストーリーやこどもたちの活動を紹介するパネルなどを展示
大泉高校のヨシストローやキクラゲ、桐生織物協同組合のコンペで入選した帯などを展示

② **日本遺産マルシェ**　館林紬関連商品や、大泉高校×関東学園大学「燕子花（かきつばた）ソーダ」などを販売

■主催　館林市「日本遺産」推進協議会
■共催　桐生市・かかあ天下ぐんまの絹物語協議会　足利市・足利市教育委員会・教育遺産世界遺産登録推進協議会
館林市・館林市教育委員会
■協力　群馬県立大泉高等学校　植物バイオ研究部　微生物バイオ研究部　関東学園大学 RCV（地域活性協力隊）
桐生織物協同組合　未来創生塾　アゼリアモール㈱　上三林ささら保存会　堀工町どんど焼き保存会　紬・組

「両毛３市の日本遺産にかかわるこどもたちの活動」紹介パネル

館林市　向井千秋記念子ども科学館 科学クラブ「里沼コース」

向井千秋記念子ども科学館の科学クラブ（年間会員制）に、令和3年度から新設された「里沼コース」では、日本遺産「里沼（SATO-NUMA）」をテーマにさまざまな体験、調査活動などを取り入れた探究的な学びを実施しています。

クラブ員の対象は市内在住の小学４年生から中学３年生の18名とし、郷土館林のよさを再発見することを目的に、自然体験、観察や実験などの科学の分野だけでなく、歴史や文化などの分野の体験活動も行います。

自分たちの考えで「どうして？」「なぜ？」という疑問を探る体験プログラムを設けており、その活動を通して、館林市や里沼の魅力を発見することができます。

令和5年度の活動のテーマ

❶ 百年小麦をもっと世間に広めろ！

科学館中庭の百年小麦の収穫体験

製粉ミュージアムでの製粉体験

百年小麦を使うラーメン店での調査

スーパーでのアンケート調査とその結果

「里沼コース」での実践を、学校教育に活かす

里沼コースの講師は、市内小中学校の理科や社会科の教諭5名が務めています。

「里沼コース」で日本遺産「里沼」を活用した教育実践プログラムを構築し、その内容をもとに各学校が独自で行っている「総合的な学習の時間」での「郷土の地域学習」の教材開発や授業づくりを行い、実践することで、日本遺産「里沼（SATO-NUMA）」を通してこどもたちの郷土愛の醸成を促す」ことを目的としています。

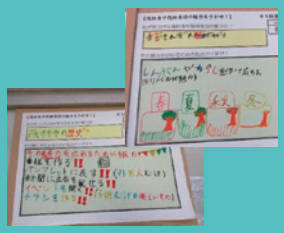
「里沼コース」の講師

❷ 茂林寺や茂林寺沼の魅力をさがせ

茂林寺沼湿原の動植物を調査

茂林寺周辺のイベント主催者への取材

大泉高校の生徒から茂林寺沼湿原の魅力を聞く


各自がみつけた「魅力」を発表

日本遺産「里沼」構成文化財を継承するこどもたち

館林市　堀工町のどんど焼き・上三林のささら

堀工町のどんど焼き（日本遺産「里沼」構成文化財❹）

江戸時代から続く年中行事で、かつては茂林寺沼に近い熊野神社の神事として、毎年小正月（１月 15 日）の夜に行われていました。

現在は地区の行事として、毎年 １ 月 15 日に近い日曜日の昼間に、堀工町ふれあい運動広場で行われています。正月飾りや古いお札、だるまなどを焚いて、１ 年間の無病息災を祈ります。ヤグラには茂林寺沼湿原のヨシも使われます。

ヤグラに点火する御神火は、地域のこどもたちによって、熊野神社から会場まで運ばれます。

熊野神社から御神火を運ぶこどもたち（令和6年1月 14 日）

堀工町のどんど焼き（令和6年1月 14 日）

上三林のささら（日本遺産「里沼」構成文化財❾）（市指定重要無形民俗文化財）

約 400 年にも及ぶ伝統があるといわれ、地区の守り神の雷電神社に奉納されている獅子舞です。「実りの沼」の多々良沼から大谷休泊が開削したといわれる下休泊堀（現在の新堀川）沿いに江戸時代から伝わっています。かつては十五夜（旧暦8月15日）に奉納され、五穀豊穣に感謝し無病息災を祈りました。現在は2年に一度、十五夜に近い日曜日に奉納されます。

かつては決められた家の長男しか継承できませんでしたが、昭和56年（1981）に地区が「上三林ささら保存会」を結成して以降、後継者育成を目的に、こどもたちへの継承活動が行われています。

上三林のささら　（令和５年10月１日）上三林町　雷電神社例大祭

館林市　群馬県立大泉高校生による 茂林寺沼湿原の保全活動

茂林寺沼湿原

大泉高校グリーンサイエンス科の「植物バイオ研究部」は、平成 30 年度より、県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」（日本遺産「里沼」構成文化財❶）において、「3つの活動目標」を掲げて保全活動に取り組んでいます。

令和4年度は関東学園大学SDG‘sプロジェクトと「ヨシストロープロジェクト」を立上げ、刈取り処分される湿原のヨシを活用した「ぶんぶく茶釜のヨシストロー」を開発しました。その後、同科の微生物バイオ研究部が、ストロー作製時に発生する端材のヨシを菌床に活用し、キクラゲ栽培に成功しました。

令和 5 年度の「日本学校農業クラブ全国大会プロジェクト発表会」で植物バイオ研究部はこの活動について発表し、見事優秀賞（2 位）に輝きました。また、令和 5 年 11 月開催の「日本遺産フェスティバル in ハ王子」では「里沼（SATO-NUMA）」のブースにヨシストローとキクラゲを出展しました。

【活動目標 ❶ 】 外来種の駆除と在来種の増殖

毎月第三日曜日開催の「茂林寺沼湿原生物調査研究会」に参加し、四季折々の湿原の植物について勉強しています。

市などが主催する茂林寺沼湿原の清や外来種駆除活動に積極的に参加しています。

市主催の茂林寺沼湿原自然学習会で、種子から育てたカキツバタを移植しました

【 活動目標 ❷ 】 湿原内のヨシの活用方法の検討

これまで廃棄されていた湿原のヨシを、ヨシストローやキクラゲ栽培に活用しました。

ヨシの刈取り

ヨシストローの作製作業

日本遺産フェスティバルでは、来場者に、ストローの使用体験アンケートを実施

ヨシを使った菌床で栽培したキクラゲ

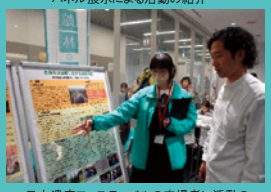
ヨシストロー

【 活動目標 ❸ 】 茂林寺沼湿原の環境保全を呼びかける活動

「日本学校農業クラブ全国大会」での発表

パネル展示による活動の紹介

科学館科学クラブ「里沼コース」クラブ員に、茂林寺沼湿原の植物を解説



日本遺産フェスティバルの来場者に活動の様子を紹介

桐生市　未来創生塾　日本遺産講座（実践ガイド）

桐生市では産官学民連携で取り組む小中学生親子が対象の教育プログラム「未来創生塾」の活動を通じて、令和3年度より「こどもガイド」の育成が始まりました。

1年目に日本遺産講座を受講したこどもに「桐生ジュニアアンバサダー」として認定を行い、2年目に「桐生ジュニアアンバサダー」による「日本遺産ツアーガイド」が行われています。「日本遺産ツアーガイド」を実施したこどもたちには「桐生ジュニアガイドマイスター」として認定します。

これまでの2年間で 15 名のこどもガイド「桐生ジュニアガイドマイスター」が誕生しました。

令和5年度「ジュニアアンバサダー」「ジュニアガイドマイスター」認定式
（令和6年1月7日　群馬大学）
前列の5名がジュニアアンバサダーに、中列の6名がジュニアガイドマイスターに認定されました。

【1年目　「日本遺産講座」】　**（令和6年1月7日）**

観光ガイド団体「"織都桐生"案内人の会」の金子副会長を講師に、日本遺産「かかあ天下ーぐんまの絹物語ー」のストーリーや桐生市内にある構成文化財について学びます。室内で紙芝居やワークシートによる講義を受けた後、重伝建の町並みや絹撚記念館などを見学しました。

紙芝居で「白瀧姫伝説」を学ぶ塾生

絹撚記念館で説明を聞く塾生
約100年前には、たくさんのこどもがここで働いていたことも学びました。

【2年目　日本遺産講座（実践ガイド）】

桐生ジュニアアンバサダーによる
日本遺産ツアーガイド
6人のこどもたちが半年かけてツアーを企画し、14名の見学者を案内しました。

絹撚記念館

桐生天満宮

書店「ふやふや堂」

ベーカリーカフェ レンガ

天然染色研究所

足利市　史跡足利学校　こども釋奠（せきてん）

「釋奠（せきてん）」とは、中国で行われていた祭りのひとつです。

もともとは「供え物をして祭る」という意味でしたが、後の時代には「儒学（じゅがく）」という学問を完成させた孔子（こうし）へ供え物をする祭だけを釋奠と呼ぶようになりました。

日本では、大宝元年（西暦701年）に初めて行われましたが、後の時代にはしだいに行われなくなってしまいました。

足利学校の釋奠は、室町時代や江戸時代、明治時代に断続的に行われていたと考えられますが、具体的な内容は分かっていません。現在の内容での釋奠は、明治40年（西暦 1907 年）に始められ、当初から多少の変更はありますが、ほぼ100年にわたり継続して開催されています。

このような伝統行事にこどもの頃から関わることで、足利学校への関心を高め、郷土愛を育み、伝統文化を継承することの大切さを学んでもらうため、平成 26 年から「こども釋奠」が始まりました。毎年9月に、市内の小中学生により、実際の「釋奠」と同じ道具や手順で執り行われます。

足利学校のシンボル「学校門」

釋奠の行われる「大成殿」

釋奠では、孔子やその弟子に肉・野菜・魚や飲み物を捧げます

飲み物を捧げる様子

孔子像の前でお香をたく様子

お祝いの言葉もこどもが朗読します

「両毛３市日本遺産こどもサミット」アンケート結果

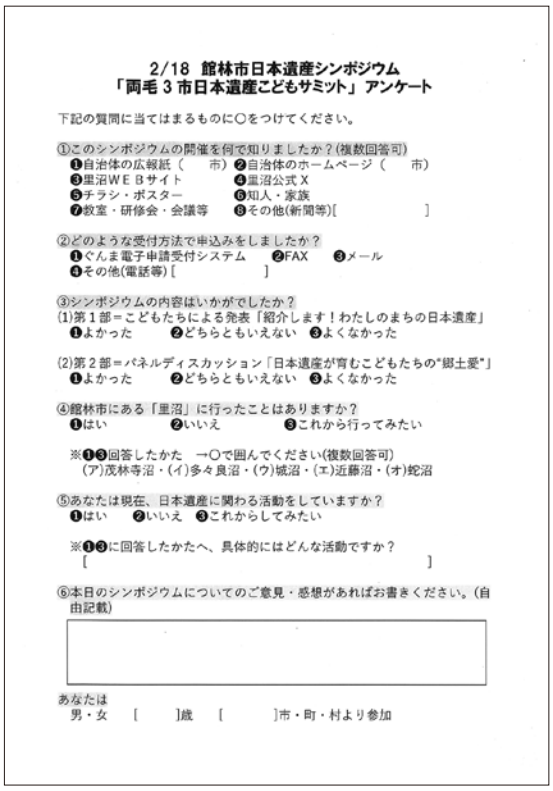
❖令和５年度館林市「日本遺産」シンポジウム「両毛３市日本遺産子どもサミット」では、事業内容の効果測定や、将来における日本遺産「里沼」及び両毛３市の日本遺産の事業展開及び地域で自発的に活動する人材の育成等に活用するため、アンケート調査を実施した。

❖アンケートは資料とともに配付し、シンポジウム終了後に受付で回収した。

❖当日の参加者90名に対し回収数は37枚（回収率41％）であった。

❖アンケートの内容は、右の写真のとおりである。

❖アンケート結果については、館林市「日本遺産」推進協議会事務局（館林市教育委員会文化振興課日本遺産推進係）で集計・分析を行った。その結果は下記のとおりである。



2/18 館林市日本遺産シンポジウム
「両毛３市日本遺産こどもサミット」アンケート

下記の質問に当てはまるものに○をつけてください。

①このシンポジウムの開催を何で知りましたか？(複数回答可)
❶自治体の広報紙（　　市）❷自治体のホームページ（　　市）
❸里沼ＷＥＢサイト　❹里沼公式Ｘ
❺チラシ・ポスター　❻知人・家族
❼教室・研修会・会議等　❽その他(新聞等)[　　]

②どのような受付方法で申込みをしましたか？
❶ぐんま電子申請受付システム　❷FAX　❸メール
❹その他(電話等)[　　]

③シンポジウムの内容はいかがでしたか？
(1)第１部＝こどもたちによる発表「紹介します！わたしのまちの日本遺産」
❶よかった　❷どちらともいえない　❸よくなかった

(2)第２部＝パネルディスカッション「日本遺産が育むこどもたちの"郷土愛"」
❶よかった　❷どちらともいえない　❸よくなかった

④館林市にある「里沼」に行ったことはありますか？
❶はい　❷いいえ　❸これから行ってみたい

※❶❸回答したかた　→○で囲んでください(複数回答可)
(ア)茂林寺沼・(イ)多々良沼・(ウ)城沼・(エ)近藤沼・(オ)蛇沼

⑤あなたは現在、日本遺産に関わる活動をしていますか？
❶はい　❷いいえ　❸これからしてみたい

※❶❸に回答したかたへ、具体的にはどんな活動ですか？
[　　]

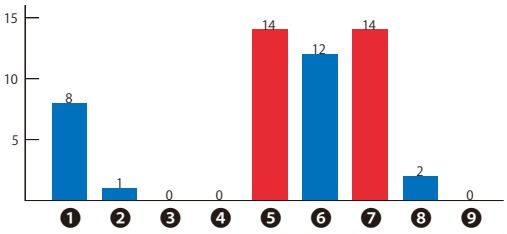
⑥本日のシンポジウムについてのご意見・感想があればお書きください。(自由記載)

あなたは
男・女　[　　]歳　[　　]市・町・村より参加

■アンケート結果　回収37枚（参加者数90名）

①このシンポジウムの開催を何で知りましたか？(複数回答可)

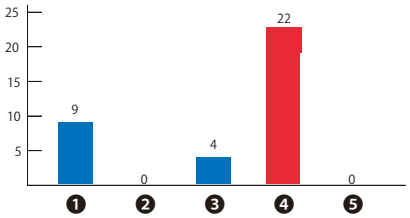
回　答	数
❶広報館林	8
❷館林市ホームページ	1
❸里沼WEBサイト	0
❹里沼ツイッター	0
❺チラシ・ポスター	14
❻知人・家族から	12
❼教室・研修会・会議等	14
❽その他(新聞等)	2
❾無回答	0



「❽その他（新聞等）」と回答したかたは、登壇者本人及びその家族である。
本事業の開催については、各市の広報紙やホームページ、各市の日本遺産の公式WEBサイトやツイッターを通じて周知を図ったが、実際には「❺チラシ・ポスター」を見て、あるいは「❼研修会・会議」や「❻知人・家族から」の紹介をきっかけに参加された方が多かった。

②どのような受付方法で申込みをしましたか？(複数回答可)

回　答	数
❶ぐんま電子申請受付システム	9
❷FAX	0
❸メール	4
❹その他(電話等)	22
❺無回答	0

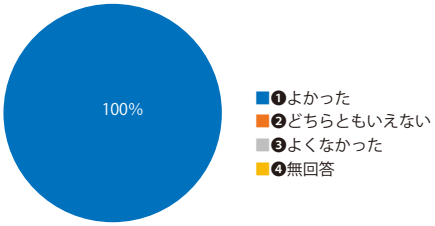


当初、受付は❶～❸のみとしたが、電話での問合せや、日本遺産「里沼」に関係するボランティア団体等での取りまとめによる申込み、また当日、直接会場に来られたかたもいたため、結果的には「❹その他（電話等）」での申込みが多くなった。
館林市の日本遺産事業では❶をメインとしているが、なかなか普及が進まない状況がある。

③シンポジウムの内容はいかがでしたか？

(1)第1部＝こどもたちによる発表

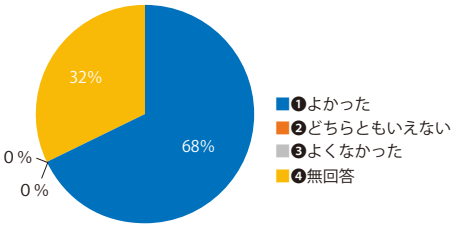
回　答　(37)	数
❶よかった	37
❷どちらともいえない	0
❸よくなかった	0
❹無回答	0



回答者の全員が「❶よかった」と回答。「どの市の子たちも堂々としていて立派だった」「それぞれの日本遺産をより深く知ることができた」「子どもたちの目線は、大人と違いおもしろい」「こんな子どもたちが各地域にいるなんてほこらしい!!」などの意見が寄せられた。

(2)第2部＝パネルディスカッション

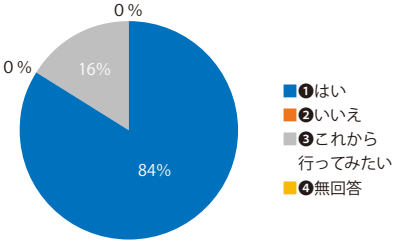
回　答　(37)	数
❶よかった	25
❷どちらともいえない	0
❸よくなかった	0
❹無回答	12



回答者の2/3が「❶よかった」と回答。「導いてくださっている先生方に感謝」「日本遺産に対して子どもたちがかかわることが、遺産の持続になるというコンセプトが今日得られたことは、大きな意義をもつ」などの意見が寄せられた。

④館林市にある「里沼」に行ったことはありますか？

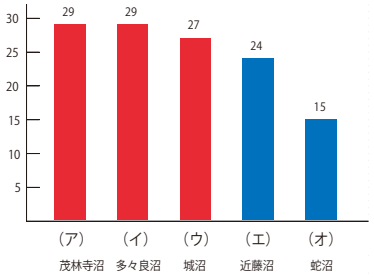
回　答　(37)	数
❶はい	31
❷いいえ	0
❸これから行ってみたい	6
❹無回答	0



「❶はい」と回答した31名の内訳は市内24名、市外７名であった。認定から５年が経過し、館林市の「里沼」が、館林市民のみならず、両毛地域の人々に定着していることがわかる。また、「❸これから行ってみたい」と回答したのは市外（桐生市、横須賀市）からの参加者であったが、このシンポジウムを通して「里沼」への関心がより高まったと考えられる。

❶❸と回答した方が「行った」「行ってみたい」沼（複数回答可）

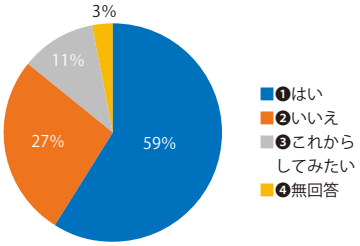
回　答	数
(ア)茂林寺沼	29
(イ)多々良沼	29
(ウ)城沼	27
(エ)近藤沼	24
(オ)蛇沼	15



「里沼」ストーリーに登場する「祈り」「実り」「守り」の３つの沼に次いで、「近藤沼」を挙げたかたが多かった。釣りや公園でのレジャーを目的に近藤沼を訪れるかたが多いことが想定される。また、市民でも認知度の高くない「蛇沼」にも、半数近くのかたが関心を持っていることがわかった。

⑤あなたは現在、日本遺産に関わる活動をしていますか？

回　答　(37)	数
❶はい	22
❷いいえ	10
❸これからしてみたい	4
❹無回答	1



「❶はい」と答えたかたの活動内容は「こども釋奠」１名、「未来創生塾」４名（いずれも登壇者）のほか、「ボランティアガイド」４名、「PR活動」３名、「百年小麦PR」１名、「大学での日本遺産の活動の研究」１名であった。
また、「❸これからしてみたい活動」の内容としては、「保全・PR活動」「ガイド」「様々な行事への参加」などの回答があった。

⑥本日のシンポジウムについてのご意見・感想があればお書きください。（自由記載）

■こどもたちの発表でそれぞれの日本遺産をより深く知ることができました。又、こども達がわが町の自然、文化や伝統を守り、かかわってくださっていることに感動しました。導いてくださっている先生方に感謝です。（女・54 歳・館林市）

■里沼をもっと PR して欲しい。日本遺産、頑張って欲しい。３市素晴らしかった。立派でした。（男・58 歳・館林市）

■素晴らしい取り組み、活動を多くの方に知っていただけるよう、本日の撮影をせめて３市に対しては HP、ケーブルテレビ等で発信してほしい。（男・44 歳・足利市）

■桐生市、足利市に行って見たくなりました。（男・57 歳・館林市）

■日本遺産という素晴らしい地元の財産を、いかに子供たちに広め、継承していくために３市を通してのサミットは今後もっと増やし、続けていって頂きたいと思いました。（女・59 歳・館林市）

■子供達の研究はすばらしかった。（男・77 歳・館林市）

■日本遺産に関わる、それは楽しくなければ続かない、次の世代に伝わらないなど、とても良い気づきになった。（男・56 歳・館林市）

■日本遺産のある街として街並をその名にふさわしくしてほしいです。補助金の内容もわかって良かったです。（女・57 歳・館林市）

■会場にてパワーポイントの投影位置が右寄りだったため、右側の席に座った者には映像が見づらかった。子供達の発表はよかった。桐生の子供はガイドをしている為、話し方がうまかった。館林市も桐生市のようにガイド養成をすべきです。（男・77 歳・館林市）

■子供達の発表はどの市の子たちも堂々としていて立派でした。素晴らしかったです。（女・74 歳・館林市）

■子供たちに伝え、広めることは大変重要で必要なことです。市民や地域（両毛も含め）取組むことが大切だと思っています。足利・桐生のこともよくわかりました。子供たちの交流にもなるかな。子どもたちの目線は、大人と違いおもしろい。どう生かすかが重要。熊倉先生の質問がなかなかむずかしいのに、答えられる子どもたちはすごい。こんな子どもたちが各地域にいるなんてほこらしい‼ありがとう‼（男・57 歳・館林市）

■スクリーンの位置が低く、後ろの席の人たちはよく見ることができなかったのでは？「日本遺産に対して子どもたちがかかわることが、遺産の持続になる」コンセプトが今日得られたことは大きな意義をもつ。桐生市・足利市の子どもプレゼンはとてもよくできていた。（男・65 歳・館林市）

■日本遺産に対する各地域の子供達の取り組みがよくわかりました。学校やガイドなどでいろいろと経験を積んでいくことが必要だと思います（男・82 歳・館林市）

■子どもたちが日本遺産をどのように見ているかわかりました。貴重な機会を設けていただきありがとうございました。（女・59 歳・館林市）

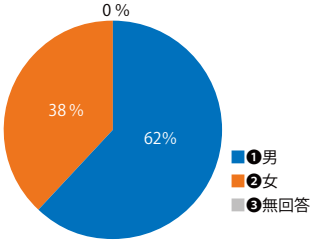
■どの市の発表もすばらしかったので、現地に行ってみたいと思いました。（女・11 歳・桐生市）

■３市の日本遺産の今と未来の話が聴けて有意義なシンポジウムでした。（男・48 歳・足利市）

【その他】参加者の属性についての質問事項

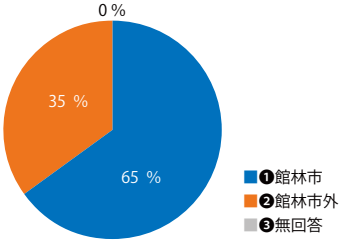
性別

回　答　(37)	数
❶男	23
❷女	14
❸無回答	0



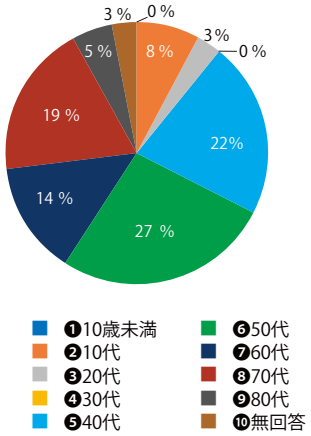
住所

回　答　(37)	数
❶館林市	24
❷館林市以外	13
❸無回答	0



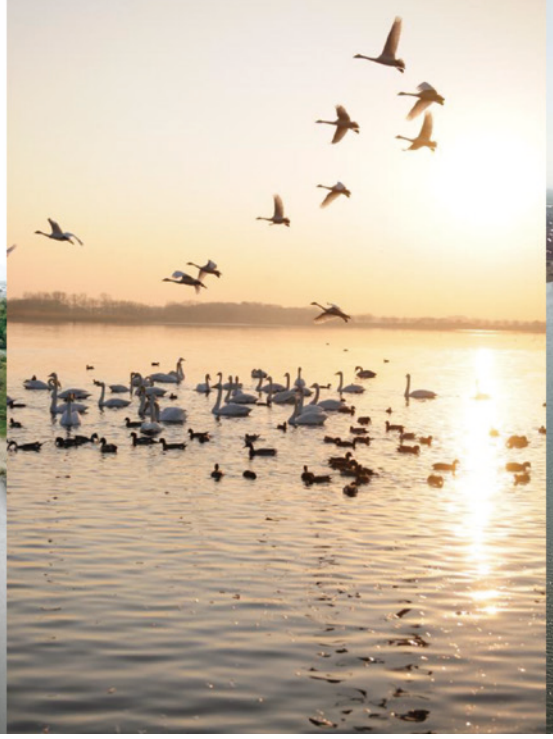
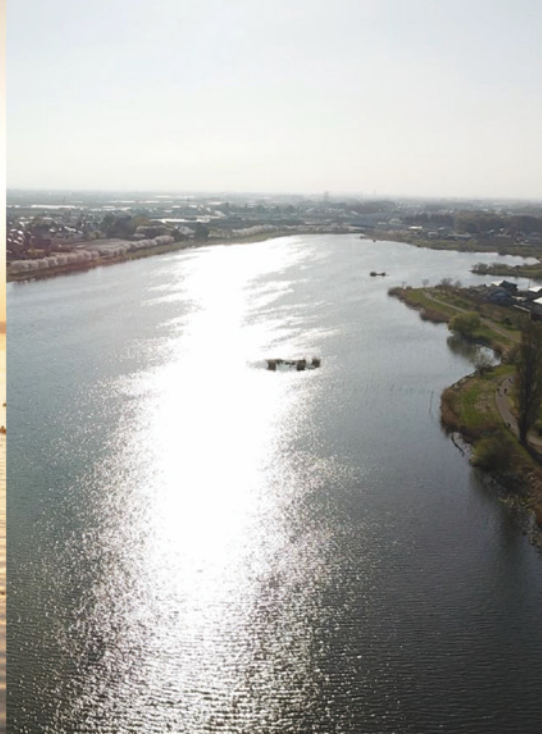
年齢

回　答　(37)	数
❶10歳未満	0
❷10代	3
❸20代	1
❹30代	0
❺40代	8
❻50代	10
❼60代	5
❽70代	7
❾80代	2
❿無回答	1



■これまでの参加者は60～70代が中心であったが、今回は「日本遺産」の普及・継承に関わるこどもの活動をテーマとしたため、発表者の小中学生（10代）や、彼らと共に活動する親世代（40代）の参加者が増え、年齢層が多様化した。パネルディスカッションの中でも、日本遺産の継承には様々な年代が関わる「世代を超えた繋がり」「地域での繋がり」を大切にしつつ、楽しみながら活動することの重要性が再認識された。

■日本遺産「里沼」の認定から間もなく５年となるが、若い世代のプレーヤーの育成や、他市のプレーヤーとの交流でよりよい活動ができるような体制を、館林市と推進協議会でもサポートしていきたい。

館林の里沼

◇令和５年度 館林市日本遺産シンポジウム◇

両毛３市日本遺産こどもサミット
「好きです！ 日本遺産のある わたしたちのふるさと」報告書

編集：館林市「日本遺産」推進協議会事務局
（館林市教育委員会文化振興課日本遺産推進係）
〒374-0018 群馬県館林市城町3-1 TEL:(0276)71-4111
Mail: nihonisan@city.tatebayashi.gunma.jp

発行：館林市「日本遺産」推進協議会
令和６（2024）年3月27日

公式HP

※ 本報告書記載内容の無断転載等は禁じます